
ティアーズ・トゥ・ティアラ 七つの炎

セマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ティアーズ・トゥ・ティアラ 七つの炎

【Nコード】

N0247T

【作者名】

セマ

【あらすじ】

エリンとアルビオンに新王国がうちたてられて半年が過ぎた。人々は平和に過ごしていたそんなある日謎の集団が帝国を乗っ取り侵略行為が行われアヴァロンに危機が訪れようとしていた。

そんなある日異世界から一人の少年が現れた。彼の名は沢田綱吉。

プロローグ

かつて大きな戦いがあった。戦いはアローンとプイルの二人の王の勝利によって終わった。だがこの戦いには異世界からやって来た人間たちが参加していたのだ。彼らは二人の王と共に戦ったのであった。

彼らの名はボンゴレファミリー

新王国がうちたてられ半年後パラディウムの塔と呼ばれる塔があった場所から空を見上げている男がいた。

「時は来た。私が全ての世界を手に入れる時が。見ているがいい愚かな白の精霊共よ。我らを見捨てた愚かな絶対神ウアトスに替わり私が新たな絶対神になる」

男はそう言いながらその場を去った。

プロローグ（後書き）

次回からアロウン側から始めます。

第1話 新たな戦い

城塞都市アヴァロンここには二人の王がいた。

一人は魔王と呼ばれたアロウン。

「くかああああ。」

今は部屋で寝ていたしかももう昼になっていた。その時アロウンは昔の夢を見たかつての友の夢を。

（アヌウブンが実現できるといいな。）

アロウンは目を覚ました。

「なんで今頃あいつの夢を、にしてもずいぶん懐かしい奴が出てきたな。」

アロウンは立ち上がり部屋を出た。

「ん？なんか騒がしいな？」

一方もう一人の王となったゲール族一の戦士アルサルは幼馴染のモルガンや他のゲールの戦士たちと共に森でイノシシ狩りをしていた。

「アルサルそちにいったぞー！」

モルガンが叫びアルサルがイノシシの方向へ向かった。

「よし来た喰らえ！」

「ブヒイイ！！！」

アルサルはイノシシを仕留めた。

「やったなアルサル。」

「ああ。」

その時であった。

「にーさまー、モーちゃん。」

「ん？」

アルサルの妹リアンノンがアルサル達にいる方向へ向かいながら走って来た。

「はあ、はあ、にーさま、モーちゃん大変です。」

「どうしたリアンノン何が大変なんだ。」

「とりあえずみなさん一旦アヴァロンに戻って来てください。早く。」

「お、おいリアンノンどうしたんだよ？」

「仕方がないみんなアヴァロンに戻るぞ！」

「おおお！」

アルサル達はアヴァロンへ向かった。

「一体どうしたんだリアンノン何が起きた？」

リアンノンは走りながら説明した。

「今朝森でキノコ狩りでもしようと思つて外に出たらデキムスさんが、デキムスさんが・・・」

「デキムス？ガイウスの副官だった奴か？」

「デキムスがどうしたんだ？」

「傷だらけで倒れてたんです！それも瀕死の重傷で！何とか一命は取り留めたんですが。」

「なんだって！本当かそれは！？」

「一体なにがあつたんだ？」

「それが・・・」

その時である。

ドカアアアン

「な、なんだ！？」

「おい、見ろ！煙が出てるぞ！！」

「何！？」

アルサル達はその方向を見ると煙が出ていた。

「な！あの方向はアヴァロンじゃないか！？」

「みんな急ぐぞ！」

アヴァロンから戻ってきたアルサル達が見たものは

「こ・・・これは・・・」

「ア・・・アヴァロンが・・・」

アヴァロンが襲撃されていた。襲撃している者は帝国の兵士のようにだが中には見たこともない格好をした者たちもいた。白い服とそれと同じ格好をした黒い服であった。よく見ると武器や足に炎を纏っており中には空を飛んでいる者もいた。

「あいつらは帝国の兵士！だがあの変な格好してる連中は何だ？」

「何だあの炎は？しかも飛んでるぞ！」

「おい何人がこっちに向かって来るぞ！」

「くそ！よくもアヴァロンをみんな一気に迎え撃つぞ！」

「はい、にゝさま。」

「おおおお！！」

アルサル達は向かって来る敵達に向かっていったのであった。

第1話 新たな戦い（後書き）

次回はリボン側です。乞うご期待！

第2話 突然の出来事

その夜一人の男が岬に向かっていた。その岬には二人の男がいた。

「アロウン、プイル準備ができたぞ！」

男は二人の男に声をかけた。

「ああ」

「では行くでしょうか！」

アロウンとプイルと呼ばれた二人の男が振り向いた。

「本当にいいのかジョット？ 今なら仲間達といっしょに逃げてもかまわないぞ？」

「何を今更、ここまで来て逃げるわけないだろ。それにお前達をほっとけないからな！」

「そうか。ありがとうジョット」

「おい、お前ら置いて行くぞ！」

「ああ、今行く！」

「……！」

ボンゴレ10代目沢田綱吉は目を覚ました。

（今のは夢？ だけどあの夢に出てきたのはボンゴレ^{フリーモ}一世。でも一緒にいた二人は一体？）

白蘭との戦いから一カ月、ツナ達は平和な日常を過ごしていた。

ツナは山本と獄寺と一緒に学校へ登校していた。

「えっ10代目もみたんスカあの夢を？」

「見たって、獄寺君も？」

「ええ、ですが俺が見たのは初代嵐の守護者Gと一緒にいる夢でした」

「俺も初代雨の守護者の朝利雨月がその二人と一緒にいる夢をみたぜ！」

「みんなの夢に同じ二人が出てくるなんて・・・」

「偶然じゃなさそうスね？」

「それにしてもあの二人一体誰なんだろうな？」

三人が学校に着くとなにやら騒がしくなっていた。

「ん？どうしたんだ？」

「あ、ツナ君！それに獄寺君に山本君も！」

ツナ達と同じクラスの笹川京子がツナ達がいる事に気づき近づいてきた。

「京子ちゃん！何なのこの騒ぎ？」

「それが大変なの！風紀委員の雲雀さんが突然消えたの！」

「えっ！雲雀さんが！！」

「雲雀さんがいつものように風紀委員の仕事をしていたら雲雀さんの足元が突然光ってそしら・・・」

「雲雀のヤロウが消えたって事か」

「でも本当なのか？」

「他にも目撃している人がたくさんいるの」

「消えたのは雲雀だけじゃねーぞ！」

「・・・！！・・・」

四人は声のした方向を向いた。その声の主はツナの肩に乗っていた。
「ちゃおっす！」

「リ、リボーンいつのまに！消えたのは雲雀さんだけじゃないってどうゆうこと？」

リボーンはツナの肩から下り事情を説明した。

「さっきボンゴレから連絡が入ってな俺以外のアルコバレーノが雲雀と同じ現象で消えてしまったらしい！」

「なっアルコバレーノまで！！」

「ああ、それだけじゃない。それと同時にマーレリングが何者かの手により盗まれたそうだ！」

「えっ！マーレリングが盗まれた！？」

「一体何が起きているんだ？」

その時である。

ピカアアッ

「な、なんだ？」

ツナの足元が突然光出したのだ。

「じゅ、10代目！」

「ツナ！」

だが、獄寺、山本、リボンまでもがツナと同じ現象が起きたのだ。

「俺らもかよ！」

「ヤベーな動けねえ！」

そして光は増し、ツナ達を包み込んだのである。

「うわあああああ！！」

やがて光は消えツナ達は消えてしまった。

「ツ・ツナ・君・」

「ん・・・今の光はいった・」

ツナが目を開いた瞬間、ツナが見たのはとんでもないものであった。

それは・・・

「うおおおお！！」

そこはさっきまでいた並盛中ではなかった。どうやら城のようだ。ツナがいるのはリングの並木道のようだ。そこにはたくさんの人達が争っていた。よく見ると彼らの格好は昔の外国の服のようであった。中には鎧を着ている者のいた。それはまるで昔の時代の戦争の

ようである。

「な・・・なんだよこれ・・・何がどうなってるんだ？」

ツナは混乱していて状況が読み込めない状況であった。

だがその時、ツナの目に見覚えのある格好をした者達が目に入ったのである。

「あ・・・あれはまさか・・・」

「ミルフィオーレファミリー!!」

第2話 突然の出来事（後書き）

次回、ツナの異世界での戦いが始まる。

第3話 ボンゴレX世（デーチモ）

「なんでミルフィオーレがこんな所に・・・」

ツナは疑問に思った。なんでミルフィオーレファミリーがこんな所にいるのかを。ミルフィオーレファミリーは白蘭がやられて壊滅したはずだ。ここは10年後の未来なのか？だがここが未来とはとても思えない。

「はっ、そういえばリボーンは？獄寺君に山本は？」

ツナはリボーン達がない事に気づく。その時ツナは背後に敵がいる事に気づく。

「うりゃあああ!!」

鎧を着た男はツナ目掛けて剣を振り上げツナは逃げようとした。その時である。

「せいやああ!!」

「ぐああああ!!」

別の男が鎧の男に剣を斬り付け鎧の男は倒れた。

男はツナより年上だがまだ若い。着ている服は昔の格好にも見えるがどこかの民族衣装にも見える。ツナは男の顔を見ると誰かに似ているような気がするのだが思い出せない。男はツナに近づき話しかける。

「おい、お前大丈夫か？」

「は、はい大丈夫です」

「ここはもう危ないぞ早く逃げ・・・」

男はツナを見つめる。それもそのはずツナの格好はこの世界にとって存在しない物であった。そもそもこの少年は一体誰だ？アヴァロニにいる人間ではないのは確かだ。一瞬奴らの仲間かと思ったがとてもそうには見えない。敵でなければこの少年は一体こんな所で何をしているのだろうと男は思った。男はツナに話しかけた。

「お前誰だ？こんな所で何をしている？」

「それが俺にもよく分からないんです！突然足元が光って気が付いたらここに！」

「とりあえずお前はここから逃げろ！そんな丸腰じゃ敵に狙われるぞ！」

「にーさまー！！」

男をにーさまと呼ぶ少女がこちらに近づく。

「リアンノンか！どうした？」

「敵が多すぎてかなり苦戦しています！それにオクタヴィアさん達も苦戦しているという報告が！」

「なんだって！」

男は驚く、その時リアンノンはツナがいる事に気づく。

「にーさまその子は？」

「分からないがあいつらの仲間ではなさそうだ。リアンノン悪いがこいつを」

その時である。

「にーさま！！何かこっちに来ます！」

「何！？」

それは空から降って来た。それはガスマスクをかぶった感じのロボットであった。

「なんだこいつは！？」

「ストウラオ・モスカ！こいつまで！」

「お前、あれが何なのか知っているのか！？」

ストウラオ・モスカはツナ達に攻撃した。

ドカアアアアン

「うわあああ！！」

「きゃあああ！！」

「わあああ！！」

ツナ達は助かったがストウラオ・モスカはまだツナ達を狙っている。

ツナはさっきの攻撃で鞆を落とし鞆から何かが出てきた。

「あ・・あれは！」

それは二つの指輪であつた。一つは宝石が埋め込まれた指輪、もう一つは動物の顔をした指輪である。だがツナは鞆の中にそんな物を入れた覚えはなかつた。

「リボーンの奴だな。さてよ、これがあるということはもしかして！」

ツナは鞆を拾い中身を調べた。そして中からある二つの物を出した。
「あつた！」

それは毛糸の手袋と飴玉が入ったケースである。ツナは急いで指輪と手袋をはめ、そして飴玉を二つ出してそれを飲んだ。

「リアンノン大丈夫か？」

「ええ、大丈夫です」

アルサルとリアンノンが立ち上がるうとしたその時、ストウラオ・モスカはアルサル達に攻撃の準備をした。

「まずい！リアンノンあいつを連れて逃げろ！」

「でもに・さまは？」

「いいからはや・・」

アルサルが早くと言いかけた時ストウラオ・モスカが攻撃をした。

「しまった！」

ドカアアアアアン

「に・さまあああ！！」

アルサルはストウラオ・モスカの攻撃を喰らつたかと思われた。だが、

アルサルは助かつてた。何故？

「大丈夫か？」

^{ハイパー}超死ぬ気モードとなったツナがアルサルを助けたのであった。

「お前、さっきの奴か？」

アルサルが驚くのも無理はないさっきまで弱そうな少年が別人のように変わっていたのである。それも額と両手に炎が灯されていた。

リアンノンもそれを見て驚いている。その間ストウラオ・モス力は攻撃の準備をするだが、

「遅い！」

ツナは高速移動をし、ストウラオ・モス力を攻撃する。

ドゴオオオオオオオッ

ツナの攻撃を喰らいストウラオ・モス力は破壊された。

「す・・すごい。一撃で・・・」

二人が驚いている時ゲールの戦士が二人に近づいてきた。

「大変だ。敵の指揮官と思われる人物が侵入してきて族長と戦ってる！それも族長が苦戦している！」

「なんだって！そんなバカなアロウンが苦戦している！何かの間違いいではないのか？」

「それが見たこともない武器を使っている上に妙な魔法を使っているみたいで族長の動きがだんだん鈍くなっているんだ！オガムや傭兵達が応戦しているが時間の問題だ！」

「そんな！に！さま早くアロウン様の処へ！」

「ああ分かってる。アロウンは今どこにいる？」

「城壁の一番最後の処だ！」

「分かった。行くぞリアンノン！」

「はい、に！さま！」

「待ってくれ！」

ツナはアルサル達を呼び止めた。

「なんだ？」

「俺にも協力させてくれないか？」

「何、本当か？だがどうして？」

「こんな事をする奴らが許せないんだ。それにこの戦いを終わらせたい頼む！」

「そうか、すまないな。そういえばお前名前は？」

「俺は沢田綱吉。ツナでいい」

「変な名前だな。俺の名はアルサル、ゲール族一の戦士だ。あつちは俺の妹のリアンノンだ」

「初めまして、リアンノンです」

リアンノンはツナにあいさつをする。

「俺は先にアロウンという奴がいる城壁に行ってくる！ところでそいつの特徴は？」

「黒い服と赤い襟巻をした男だ！頼んだぞ！」

ツナは両手を後ろに掲げ炎を逆噴射させ、アロウンのいる方向へ飛んで行った。

「と・・飛んだ!!」

「あいつ、あんな事までできたのか・・・」

アロウンは苦戦していた。傭兵も全滅し今この場にいるアロウンとオガムの二人と敵の指揮官だけである。

「はあ、はあ、オガム無事か？」

「ええ、なんとか・・それよりアロウン様。奴が使っているあの炎」

「ああ、分かっている死ぬ気の炎だ！それも雨の死ぬ気の炎まさか再び見る事になるとは・・・」

「ハハハハハハ、どうした魔王さんに大賢者さんよーその程度かよおおっ!!」

敵の指揮官は残忍そうな顔をした痩せた男であった。背中には触手のような物が六つ張り付いていて両手には鎌を持っていた。敵の指

揮官は叫んだ。

「この城の乗っ取り部隊の隊長を任されたブラックスペルのクルデル様がわざわざ来ったのによおこの程度のザコだったのかハハハハハハハハハハ！」

「よく言うぜ！その触手で雨属性の死ぬ気の炎を放出させ動きを鈍らせているんだろう」

「なあああんだ死ぬ気の炎知ってたのかああ。じゃあこの死ぬ気の炎は何属性か知っているよなあああ」

クルデルの二つの鎌に赤い炎が灯ったのである。

「それは嵐の炎！！」

「正解だ、ハハハハハハハハハハ！！」

クルデルがアロウンを斬り付けようとしたその時である。

「そこまでだ」

ツナが現れクルデルの攻撃を止めたのである。

「ジョ・ジョット？」

アロウンはツナを見てかつての仲間の名を呼んだ。

第3話 ボンゴレX世（デーチモ）（後書き）

次回ツナとクルデルとの戦い！果たして勝つのは？

第4話 X世（デーチモ）の戦い

アヴァロンの城壁の一つそこには20人の帝国兵がいた。だがその内の10人の持っている武器はなんとマシンガンであった。城壁を守っているのは帝国の元女剣士オクタヴィアを含む9人だけとなった。それも全員新米の兵士ばかりであった。

「も、もうだめだ！俺達全員ここで死ぬんだ！」

兵士の一人は怯えていた。

「怯えるな！まだそうと決まった訳ではない！」

オクタヴィアは怯えた兵士に怒鳴る。

「くそっ！帝国の連中いつのまにあんな強力な武器を！」

アヴァロンの兵士達が悔しがる一方、帝国の兵士達は喜んでいた。

「すげえぜ！さすがミルフィオーレが提供してくれた武器だ！」

「これさえあれば俺達は無敵だぜ！」

「よし、あいつらとつと倒して先に進むぞ！」

帝国の兵士達はマシンガンを構える。

「まずい来るぞ！」

その時である。

「ぐはあ！」

「がああ！」

「ぎゃああ！」

帝国の兵士の内三人が突然倒れる。

「な、何だ？」

「ぎゃああああー！」

帝国の兵士が次々に倒れていき残るは5人だけとなった。

「どうなってるんだ！何が起きた！」

「下を見な！」

突然声がして帝国の兵士達が下を向くとそこには・・・

「ちやおっす！」

一人の赤ん坊がいた。

「な・・なんだこのガキ？」

「邪魔だ！どきやがれ！」

帝国の兵士が赤ん坊を蹴り飛ばそうとしたが赤ん坊はそれを避けジヤンプし帝国の兵士を殴り飛ばした。

「ぐへえええ！！」

赤ん坊に殴り飛ばされた帝国の兵士は

「こ、こいつ！」

赤ん坊は銃を手に持ち銃を撃つのであった。

「カオスショット！」

赤ん坊は4回撃ち4つの弾丸は黄色い光を浴びながら帝国の兵士達に当たるのであった。

「「「ぎゃあああああ！！」「」「」

帝国の兵士達は攻撃を喰らい倒れていった。

「す、すごい！赤ん坊が帝国の連中を倒しやがった！」

「お前は一体？」

オクタヴィアは赤ん坊に話しかける。

「俺の名はリボン！家庭教師だ！」

（あ・・あれはジョット！いや違う！だが、あの炎にグローブは・・）

アロウンは突然現れたツナを見て驚いていた。かつての仲間の面影があり彼が使っていたグローブと同じのをしていた。そして額と両手には炎が灯されていた。

「ん？お前ひょっとしてボンゴレ^{ディーチェモ}X世の沢田綱吉じゃねえかああ？」

アロウンとオガムはそれを聞いて驚く。

（ボンゴレ^{ディーチェモ}X世だと！それじゃあ、あいつは！）

アロウンはツナの右手を見る。よく見ると指輪をはめていた。それ

の手の甲に乗ったのである。

「天空ライオンver.v」

「ガオ」

「なんだありやあ？猫？いやライオンか？」

アロウンは天空ライオンのナッツを見たらそんな事を言った。ナッツは雨スライムに目掛けて雄叫びをあげた。

「ガオオオオッ！！」

ナッツの雄叫びによりクルデルの鎌と雨スライムは石化してしまつたのであつた。

「げえええ!!お・俺の匣兵器がああああ!!」

それを見たアロウンとオガムは驚いていた。

「……これは一体？」

「おそらく大空の調和を利用したものではないかと」

「もう勝負はついた！降参しろ！」

「降参だとおおお！！まだ勝負はついちゃいねええぜええええ」

ポックス
ポックス

クルデルはポケットから匣を出しリングに炎を灯しそれを匣に注入した。

「嵐スライム」

「何！！」

「見ての通り雨スライムの嵐バージョンだぜええええ！ハハハハハハハハ！」

嵐スライムはクルデルを包み込みクルデルは嵐の炎を灯した巨大な鎧を身に付けた姿になったのである。しかも両手には嵐の炎を灯した巨大な二つの槍を持っていた。

「ハハハハハハ！喰らいやがれええええ！」

クルデルはツナに目掛けて突進してきた。

「アロウン、無事か？」

アルサルとリアンノンがアロウンの元に駆けつけたのであった。

「アルサル、それにリアンノンも！」

「アロウン様、大丈夫ですか？」

「ああ、なんとかな」

「にーさま！！あれを！！」

「あれは・・まずい！！いくらあいつでもあんなの喰らったらお仕舞いだぞ！何を立ち止っているんだあいつは！！」

アルサルはツナを助けようとするが

「待て」

アロウンがそれを止める。

「何をするアロウン！？このままではあいつが！！」

「いいからこのまま見ていろ」

「ですがアロウン様！」

（もしあいつがジョットの子孫なら倒せるはずだ）

「おおお、アロウン様あれを見てください！」

「ん？あれはまさか！」

クルデルが槍をツナに向けたその時であった。クルデルの槍が両腕ごと凍ってしまったのである。

「こ・凍った！！」

「まちがいない！あれは零地点突破だ！」

「な・なんじゃんこりゃああああああ！！両腕丸ごと凍っちま・
」

クルデルが凍っちまったと言いかけた時ツナがクルデルの顔面を殴り飛ばせたのであった。

「ぎゃああああああああああああ！！」

ドゴオオオオオオオオ

クルデルはツナの攻撃を喰らったため気絶していた。その間ツナは元の状態に戻っていた。アロウンはそれを見て驚いた。

「何んだ！急に雰囲気が変わったぞ！」

無理もないさつきまで勇敢に戦った少年が突然弱い感じの少年にな

つたのだ。

アルサルはツナの元に駆けつけた。

「すごいじゃないかツナ！敵の指揮官を倒すなんて！」

「アルサル様！どうやら喜ぶのはまだ早いそうですぞ！」

「何？」

アルサルはクルデルが飛ばされた方向を見る。クルデルが起き上ったのだ。

「やばい！もう目覚めやがった！」

だがクルデルがツナの顔を見たたん

「ひ、ひえええええええええ！殺されるうつつうつ！」

「うわああああああああああ！！！」

クルデルはものすごいスピードで逃げて行ったのだ。

「
・
・
・
逃げたな」

「……逃げましたね」

「こいつに恐れをなしたか」

「ものすごいスピードでしたね……」

「水水水水」

クルデルは子供のように泣きじゃくりながら逃げていた。それを見た兵士は

「あれ？クルデル隊長？どこに行くんです？」

「こんな所にいたら殺されるぅぅぅぅぅぅ！逃げろおおおお
おおお！！」

それを見た兵士達は啞然としていた。

「つてええええええ！クルデル隊長逃げたあああ！！」

「おい、どいす？」

「決まっているだろ！俺らも逃げるぞー！！」

クルデルが逃げた事を知った帝国の兵士とミルフィオーレの兵士達

はアヴァロンから撤退していった。

「見る！帝国軍が逃げていくぞ！」

「我らの勝利だ！」

「「「「「おおおおおおおおおおおおお！！」「」「」「」

一方帝国の玉座の間では大きな水晶を見つめている二人の男がいた。一人は玉座に座っている白いロングコートの上に黒いマントを纏った金髪の男。もう一人はそのとなり立っている黒いマントで身を包んだ仮面の男であった。

水晶にはアヴァロンでの戦いが映されていたのであった。

「アヴァロンの占拠は失敗か。まあいい、おかげでボンゴレX世^{デイチモ}の戦いが見れたのだからな」

「では陛下、私はこれで」

黒いマントの男は玉座の間から出ていく。

「ボンゴレX世^{デイチモ}沢田綱吉。かならず貴様や貴様の守護者のボンゴレリングを手に入れてやる！私の復讐のため、そして私が世界の王となるため！」

金髪の男はそう言いながら玉座から立ち上がり笑い始めた。金髪の男の右手には指輪がはめられていた。広げた翼の着いた銀色の指輪が・・・

第4話 X世（デーチモ）の戦い（後書き）

次回、アロウンが初代ボンゴレファミリーとの関係を語る！

第5話 事情説明 その1

「おい、アロウン！無事かー！」

「アロウン様ー！」

モルガンとアザラシ妖精のスイールと鉦山妖精のラスティ、それにゲールの戦士達がアロウン達の元に駆けつけてきた。

「よう、お前らも無事のようだな」

「うう、よかったです！アロウン様。敵の指揮官に苦戦しているって言うから心配で・・・」

「アロウン様が敵の指揮官を倒したんだね」

「いいや倒したのは俺じゃない」

「えっじゃあアルサル？」

「いいやあいつだ」

「え？」

モルガン達はアロウンが指を指した人物を見る。モルガン達が見たのは見覚えのない弱弱しい少年であった。モルガン達は少年を見て驚く。

「え、えええええええ！あの人が！」

「う、うそ！」

「ハハハハ、アロウン冗談にもほどがあるぞ！」

「まあ、お前らが信じられないのは無理もないが事実だ！」

「ああ、俺も見ただ。ついでに俺もあいつに助けられたんだ！なあリアンノン」

「はい、この目でちゃんと見ました！」

「この通り証人もいますぞ！もちろん私もその一人です！」

「みんながそう言うんなら・・・」

「あ、オクタヴィアだ！」

ラスティがオクタヴィアが新米の兵士達を連れてこっちに近づくとに気づく。

「アロウン、どうやら無事のようだな！それにみんなも！」

「どうやらツナがやったようだな」

「……！！」「……」

アロウン達は聞き覚えのない声を聞き、その声の主が下にいる事に気づく。

「ちやおつす！」

「あ・・赤ん坊？」

「リ、リボーン！よかった無事だったんだ！」

「当たり前だ！」

「か・・かわいい」

「あ、赤ちゃんが喋ってる！」

「ん？こいつツナの弟か？」

「えっと、リボーンは……」

「俺の名はリボーン！こいつの家庭教師だ！」

「はあ？」

「なあ、オクタヴィア。かてーきょーしってなんだ？」

「家庭教師と言うのは家庭に招いてその家の子供を個人的に指導する教師の事だ。」

「そのかてーきょーしがどうしてオクタヴィアと一緒にいたんだ？」

「実は私達はこの赤ん坊に危ないところを助けてもらったんだ！」

「赤ん坊に助けられた！？」

アロウンとアルサルは赤ん坊を見る。この赤ん坊とても嘘を言っているようには見えない。それにこの赤ん坊ただ者ではなさそうだ。

「ところでお前ツナと言ったか？」

「あっはい。そうですけ……」

ツナはアロウンの顔を見てある事に気づく。

「ああああ！！あなたは夢の中に出てきた人！」

「夢の中って？お前の夢の中に俺が出てきたのか？」

「ええ、そうですけど……」

「まあそれは置いて、お前に話がある。場所を変えるからつい

て来い。お前らもだ！」

アロウン達は城の広間に集まっていた。

「あの・・話って一体？」

「とりあえず俺の質問に答えてもらおうか」

「なんですか？」

「お前ボンゴレファミリーの人間だな。それもそのボスの」

ツナとリボーンは驚く。アルサル、リアンノン、モルガン、オクタヴィア、ゲールの戦士達や新米の兵士達はなんの事だかさっぱりだった。スィールとラスティは驚いていた。

「つてえええええ！な・・なんでボンゴレファミリーの事を？」

「ボ・・ボンゴレファミリー！？それもそのボス！？」

「ほ・・本当ですかアロウン様？」

「ああ、それもこいつはジョットの直系だ。間違いない！」

「なっ！ボンゴレ一世の事まで！」

「ジョット様の直系！」

「全てを包み込む大空と呼ばれたあの・・」

「おい、一体なんの話だ？ボンゴレって一体何だ？」

アルサルは質問する。

「ボンゴレファミリーはかつてアロウン様とピル様と共に戦った人間の勇者達の事です」

「異世界からやって来たとも言われており妖精族を救った人間の英雄達とも言われております」

「異世界から！」

「後は私が説明しましょう」

オガムがボンゴレファミリーについて説明する。

「そもそもボンゴレファミリーとはマフィアと言う犯罪組織なのですが、元々大切な人々を守るための自警団として造られた組織のた

め仲間や人々を大切にする意識が強い組織でした」

「えっ！ボンゴレって犯罪組織だったの？」

「そんな！シヨックです！」

スィールとラストィはボンゴレが犯罪組織だと知るとシヨックを受ける。

「そのような連中がアロウンと共に戦った訳か」

「そのボスであるジヨット殿またの名をボンゴレ^{フリーモ}一世は全てを包み込む大空と呼ばれるほどの最強のお方でした」

「全てを包み込む大空か。さぞ強かったんだろうな」

「ついでにいますとそこにいるツナ殿こそ、そのジヨット殿の直系の方なのです」

「何！本当か？」

アロウンがそれに答える。

「ああ、間違いない。奴の面影がある。それにこいつの戦い方はジヨットと同じだ！」

「どうりで強いわけだ！」

「わりのが今度は俺の質問に答えてくれねーか？」

リボーンがアロウンに質問する。

「なんだ？」

「お前達の事について話してくれねーか？初代ボンゴレファミリーについてもここがどこなのかも」

「ああ、答えてやるさ。知っている事全部」

アロウンはツナとリボーンに説明した。ここが異世界だと言う事、城塞都市アヴアロンの事、青銅の時代での戦いの事、その戦いで自分分は1200年も眠りについた事やゲール族との出会いや帝国との戦いの事やアルサルが竜王^{ペントラゴン}になった事も、ボンゴレファミリーとは青銅の時代で共に戦った事もだ。

「しょ、初代ボンゴレファミリーのかつての仲間！？しかもあなた

人間じゃないんですか!？」

「ああ、そういう事だ。あいつらはどういう訳かこの世界に迷い込んだらしいく、自分達がどうやってこの世界に迷い込んだのか自分達でも分らず俺達と一緒に行動しそして共に戦った。オガムの話では俺が眠りについた後自分達のいた世界に戻る方法を見つけために旅立ったらしい」

フリーモ

「だけどボンゴレ一世が生きていた時代とは合わないんですけど？」

「おそらくお前達の世界とこの世界の時間の流れが違うのだろう」

「ありえるな。でないと辻褄が合わないえ！」

「ていうかアルサルさんって王様だったの!？」

「ああ、すまん。そういうえ言ってなかったな」

「さて、さっきの質問の答えを聞こうじゃないか。それと帝国と一緒にいた連中の事もな。お前ら帝国と一緒にいた連中の事知ってるようだな答えてもらおうか」

「そういえばそうだな」

「ツナ答えてやれ」

「って俺かよ」

「いいからやれ」

リボーンはツナを蹴り飛ばす。

「いつてええ!何するんだリボーン!」

「いいからやれって言ってんだ!」

「ぎゃふん!」

今度はツナの腹に突進する。それを見たアロウン達は

「お、おっかねえ!」

「なんて赤ん坊だ!」

「なんと!このジジイ度肝を抜かれましたぞ!」

「あ……」

「うつつ痛そうだぞ……」

「ひひひひひ!」

「あわわわわ!」

「やはりただ者ではないな。あの赤ん坊」

ツナはアロウン達に話した。自分達が異世界にやって来た事とその経緯、自分がボンゴレの次期ボスである事、リボーンがツナをボンゴレのボスにするための家庭教師だということ、そして10年後の世界で白蘭率いるミルフィオーレファミリーとの戦いの事を話したのであった。

「そのような事があつたんですね」

「はい」

「そうか、お前もいろいろあつたんだな」

「ツナ殿をこの世界にきた原因である光というものどうも気になりますな」

「ああ、そうだな。だがミルフィオーレの事も気になる」

「ツナ、本当にミルフィオーレの親玉ビャクランといったか？本当に倒したのか？」

「間違いありません。それに奴らはミルフィオーレに新しいボスができたと言っていました」

「なるほどな。それじゃあビャクランと言う奴の仕業じゃなさそうだな。だがどうしてそいつらが帝国と一緒にいるんだ？」

「ミルフィオーレと手を組んだといったところか」

「でもどうして？」

その時であった。

「それは私が説明します」

広間から一人の男が入ってくる。

「デキムス！動いても大丈夫なのか？」

「ええ、もう平気です」

「あなたは？」

「こいつはデキムスって言って帝国軍の人間だ。軍は退役したがな」
「私がキノコ狩りに出かけたら重傷を負っていて倒れていたんです」

「私の治癒魔法でなんとか治したんです」

「重傷したデキムスを見てみんな騒いでいたよ」

「ああ、あの騒ぎの原因はこいつだったか。その後に襲撃が起きたんだっとな」

「デキムス一体何があった？帝国に何が起きている？」

「はい、実は帝国はそのミルフィオーレファミリーと言う集団に乗っ取られたんです！」

「なんだって！帝国が乗っ取られた！」

第5話 事情説明 その1（後書き）

次回、デキムスが帝国で起きた出来事、そしてツナが死ぬ気の炎について語る！

第6話 事情説明 その2

「まさか帝国が乗っ取られていたなんて・・・」

「はい、奴らは突然現れ圧倒的な力で帝国を乗っ取ったんです！その手始めに元老院を皆殺しにしました！」

「元老院が！」

オクタヴィアは驚く。

「ええ、今では帝国は完全にミルフィオーレに制圧され、帝国の人間のほとんどがミルフィオーレに従い、ミルフィオーレに与えられた武器を使い各地で侵略行為を行い、自分達にとって邪魔な存在を殺し、女子供まで殺し、非道な行いをするばかり。神聖帝国と名乗っていた時の方がましと思うくらいです！」

「なんて事を・・・」

「私も奴らにとって邪魔な存在となり私を殺そうと刺客を送りました。私は手も足も出せず逃げるのが精一杯でした。」

「そんなに強い刺客だったのか？」

「奴らの力と言うより奴らの持つ炎を灯した武器が協力すぎて・・・」

「

「あの炎か！あの炎は一体？」

「死ぬ気の炎だ！」

アロウンが答える。

「アロウン知っているのか！？」

「ジョットからいろいろ教えてもらったからな」

「ボンゴレ^{フリーモ}一世からですか？」

「で、その死ぬ気の炎とは一体？」

「俺が説明したいところだが、ツナ説明してやれ！」

「ってまた俺！？」

「お前も死ぬ気の炎使えるだろ。死ぬ気の炎の使い手であるお前から説明した方がいいだろ」

「それもそーだな。ツナ説明してやれ！」

「ったく！分かったよ！」

ツナは死ぬ気の炎について説明する。

「死ぬ気の炎って言うのは超圧縮エネルギーで七つの属性があり、「晴」、「雷」、「嵐」、「雨」、「霧」、「雲」、そして「大空」の七つ」

「まるでお天気ですね」

「うん、これらの属性はそれらの天候になぞらえてるんだ。これらの七つの属性を大空の七属性と呼ばれていて、これらの炎の色は「晴」は黄色、「雷」は緑、「嵐」は赤、「雨」は青、「霧」は藍色、「雲」は紫、そして「大空」はオレンジ」

「そつえばいろんな色をした炎がいつぱいだったぞ！」

「それとそれらの属性にはそれぞれの性質があつて「晴」が活性、「雷」が硬化、「嵐」が分解、「雨」が鎮静、「霧」が構築、「雲」が増殖、そして「大空」が調和の性質を持っているんだ」

「なるほどな。てことはアロウンが苦戦していたのは・・・」

「ああ、雨の死ぬ気の炎で動きを鈍くされた！」

ツナは説明を続ける。

「死ぬ気の炎を出すには二つの条件があつて、一つは死ぬ気の炎を灯す特殊なリング、そして二つ目は覚悟。この二つが死ぬ気の炎を出す条件」

「ようするに死ぬ気の炎を出すには指輪と覚悟が必要って事か」

「ああ、はらくくるって事かあー。それならあたしらはとつくの昔にできてるぞ！」

「ツナ、実際に死ぬ気の炎を出すところを見せてやれ」

「分かったよ」

ツナはポケットからボンゴレリングを取り出す。スィールとラストイはボンゴレリングを見ると

「ああああ！それってボンゴレリング!？」

「すごい！初めて見ました！」

「なんだ？どうした二人とも」

アルサルは二人に質問する。

「あの指輪はボンゴレリングって言ってボンゴレのボスとそれを守護する5人の守護者の証である6つの指輪の一つです！それもあれはボスの証の天空のボンゴレリング！」

（っえ？6つ？）

「へえ、守護者なんてのがいるのか。ツナお前にもいるのか？」

「ええ、いますけど・・・」

その時、リボーンはアロウンにある事を問い詰める。

「アロウンどういう事だ？守護者が5人だと！？」

「どういう事ですか？」

スィールはリボーンに質問する。

「ボンゴレの守護者は全員で6人、すなわちボンゴレリングは7つあるんだ！」

「ええええ！ボンゴレリングって7つあったんですかー！？」

「ああ、そういえば守護者は6人いるって言ってたな」

「てことはD・スパー^{デモン}ドは初代ボンゴレファミリーと一緒にこの世界には来なかったんだな？」

「そういう事だ」

（なるほど。つまりDスパー^{デモン}ドが裏切った後の出来事というわけか・

・・・）

「ツナ、早く死ぬ気の炎を！」

「あ、ごめん」

ツナはボンゴレリングを指にはめリングに炎を灯す。

ボオオッ

「おおお！」

「火がついた！」

「ボンゴレリングってこんな事ができたんだ！」

「すごいです！」

「オレンジ色の炎という事は大空の属性か」

「なんと！」

「奴らは自分達の武器にこれと同じ炎を灯した訳か」

「その事なんだが、奴らが使っていた武器は匣兵器^{ボックス}っていつて死ぬ気の炎を使った兵器だ！」

「死ぬ気の炎を！」

アルサルがそう言うのとツナはもう一つの指輪をだす。

「なんだその指輪？」

「これはアニマルリングって言って匣兵器^{ボックス}をリングにした物です！」

「なんか動物みたいだな」

「匣^{ボックス}にはアニマルタイプや武器タイプなどいろんな種類があるんです」

「なるほどな。いろんな種類があるんだな」

ツナはアニマルリングに炎を灯した瞬間、リングは姿を変え一匹の子供のライオンになる。

「ガオ」

「なっ変わった！」

「か・・・かわいいい？」

「おお、ちっちゃいなあ」

「・・・」

オクタヴィアはナッツを見たたん固まっていた。

「ん？どうしたオクタヴィア？」

「・・・あ、いやなんでもない」

「俺のアニマルリング、天空ライオン。名前はナッツって言うんだ」
ナッツはツナの後ろにかくれる。

「ん？こいつさっきと雰囲気が違う気が・・・」

「ナッツは戦う時以外は臆病になっちゃうんです」

「ペットは飼い主に似ると言うがこいつはまさにそれだな」

アロウンがそんな事を言った時アルサルはある事を問う。

「ところでアロウン、これからどうする？このまま黙っている訳に

はいかないだろ！」

「当然だ！俺達はミルフィオーレに戦いを挑むぞ！いいなお前ら！」

「……応……！」

全員は一致団結したのであった。ツナとリボン以外は。

「ところでお前らこれからどうする？」

「えっ？」

アロウンはツナに質問する。

「元世界に帰る方法やお前の仲間が見つかるまでアヴァロンに留まってもいいが、聞いての通り俺たちはミルフィオーレと戦う事になった。お前ら一体はどうする気だ？」

ツナは一瞬迷ったが、答えはすぐに決まった。

「俺……みんなと一緒に戦います。獄寺君や山本の事も気になるけど、あんな事をするミルフィオーレを見過ごす訳にはいかないし、俺やっぱりアヴァロンのみんなをほっとく事ができないよ！だから俺もアヴァロンのみんなに協力する！」

「よく言ったぞツナ！それでこそ俺の生徒だ！」

アロウンはそんなツナを見て笑う。

「はははは、やはり血は争えないか……。いいだろう！お前ら意義はないな！」

「ああ、もちろんさ！」

「私達を助けてくれたんですもの！意義なんてありません！」

「おう、今日からよろしくな！」

「ふふ、頼りにしているぞ！」

「ジョット様の直系の方が味方になってくれるなんて感激です！」

「これからよろしくね！」

ゲールの戦士達と新米の兵士達も同意見である。

「ホホホどうやら意義はないようですね！」

「俺の事も忘れるなよ！」

「ああ、分かっているとも！よろしくなりボーン！」

「あの……」

デキムスがアルサルに声をかける。

「どうしたデキムス？」

「私もあなた達と一緒に戦います！」

「なっ！正気か！」

「ミルファイオーレにとって私は邪魔者です。それに私だけこのまま引き下がる訳にはいきません！ヘントラゴン竜王アルサルどうか・・・」

「・・・分かったよデキムス！そこまで言っんなら」

「ありがとうございます！」

アルサルとデキムスがそんなやり取りをしている間ツナはある事を話す。

「あの、すみませんが・・・」

「分かっております！ツナ殿のご友人の件に関しては私目におまかせを」

「ありがとうございます！」

「そうと決まれば、リムリス！エルミン！」

アロウンがそう言うのと二人のメイドが入ってくる。

「およびでしょうかアロウン様？」

「呼んだ王様？」

「客人だ！今日からしばらくここにやつかいになるから後で部屋を用意してやれ！」

「かしこまりました。お客様ようこそアヴァロンへ、私はこの家付き妖精のリムリスと申します。こっちは家付き妖精見習いの」

「エルミンだよ。よろしくね！」

「ああ、どうも。こちらこそよろしく」

リムリスはツナのボンゴレリングに目が入りある事に気づく。

「あら？その指輪・・・あ、ま・・・まさかアロウン様この方は・・・」

「ああ、お前の思っている通りだ」

「まあ、やはりそうなんですネ！エルミン、ボンゴレファミリーの方よ！」

「ボンゴレファミリー！」

「申し訳ございません！まさかボンゴレファミリーの方が来ていたなんて本当に申し訳ありません！」

「申し訳ない！」

「そ、そんな俺達だつて突然来たんだし仕方がないよ！」

「そうだぞリムリス！こいつもそう言つてんだ！謝る事はない！」

「ですがアロウン様、この方ボンゴレのボスの方ですね！それにもしやこの方ジョット様のゆかりのある方では？」

リボーンがそれに答える。

「ああ、そうだぞ！こいつはボンゴレ^{フリーモ}一世の直系で次期ボンゴレ10代目沢田綱吉だ！」

「やつぱり！申し訳ございません！申し訳ございません！」

「申し訳ない！」

リムリスとエルミンは誤り続ける。

「なあああ！リボーン！何余計な事を言つてるんだよ！」

「俺は本当の事を言つたまでだぞ」

「おい、ツナ早くやめさせろ！このままじゃリムリスとエルミンの背骨が折れてしまう！」

「なんか前にも見たなこんな光景・・・」

その後、ツナ達はリムリスとエルミンが謝るのを止め、アヴァロンの修繕工事に取り掛かったのであった。

第6話 事情説明 その2（後書き）

次回、再びミルフィオーレの魔の手が！

第7話 狩り

アヴァロンに来て翌日の朝、ツナはリムリスとエルミンが用意してくれた部屋で眠っていた。アヴァロンの襲撃されて壊された所がたくさんあったが修繕工事は1日で終わった。ミルフィオーレと戦いと修繕工事を手伝ったせいかツナはかなり疲れていたためかなり熟睡していた。その時、アルサルが突然部屋に入ってくる。

「おい、ツナ！早く起きろ！」

ツナは目を覚ます。

「ふあゝ。あ、おはようアルサルさん」

「「あ、おはようアルサルさん」じゃない！悪いがついて来てくれ」「え？何かあったんですか？」

「お前に頼みがあつてな、とりあえず一旦広間に来てくれ！みんなそこで待っている！」

二人は広間に着いた。そこにはリアンノン、モルガン、オクタヴィア、スィール、ラステイ、デキムスがいた。ちなみにモルガン達はすでに自己紹介をしている。

「おはようございます、ツナさん」

「おはよう、ところで頼みついていたい？」

「実はこれから浜辺へ狩りに出かけようと思ってるんだが、アロウンの奴まだ寝ていてオガムも用があつて手が離せないからお前にも手伝ってほしいんだ。」

「ええええ！狩りの手伝い！」

「リボーンがそれを聞いてツナの修行になるから連れて行けって言われてさ、それにお前の実力をモルガン達にも見せようと思って、頼む！」

「・・・分かりましたよ。準備するから門の前で待っていてください」「分かった。待ってるぞ」

そして準備を終えたツナはアルサル達と一緒に浜辺に着いたのであった。

「で、魚でも釣るんですか？それとも」

「いいや、蟹狩りだ」

「えっ？蟹？」

ツナがそういうとモルガンがなにかを出した。

「モルガンさん、それは？」

「蟹笛だ。これで蟹を呼ぶんだ！」

モルガンは蟹笛を吹く、そして砂から何かが出てこようとしていた。

「おっ、来やがったな」

「え・・・」

ツナはギョツとした目でびっくりしていた。それもそのはず、出てきたのはたくさん蟹達であつた。かなりでかい

「ちよつとおお！あの蟹でかすぎなんですけどおお！！」

「まあ、驚くのも無理ないなこのアルビオンは自然が豊かだからな・

・・・」

「豊かにもほどがあるでしょ！」

「まあこれなら倒しがいがあるな」

突然蟹の格好をしたリボーンが現れた。

「うわっ、リボーンいつのまに！？」

「どっからわいて出てきた！？」

「あ、あのリボーンちゃんその格好は？」

リアンノンはリボーンの格好を見て質問する。

「家付き妖精達に造ってもらった衣装だぞ」

「意外とかわいいところあるんだなお前・・・」

「ツナ早く戦闘の準備をしろ！早くしないとあの力二共の餌にされるぞ！」

「分かってるよ！」

ツナはボンゴレリングとアニマルリングをはめ手袋をはめた。

「あれ？あの黒い手袋は？」

「いや・・・これがその手袋だけど」

「え、ええええええ！」

「それ毛系の手袋じゃないか！昨日の手袋と全然違うじゃないか！」

「まあ、見ている」

ツナはポケットから小さいケースを出しその中から二つの飴玉を出し飲み込み超死ぬ気モードへと変身した。

「うわああ！ツナが変わった！」

「さつきとはまるで別人ではないか！」

「す、すごいです！」

「か、かつこいい！」

「なんと、額に炎が！」

モルガン達はツナが死ぬ気モードになったのを見て驚いていた

「本当にあの手袋だったのか・・・」

「リボンちゃん、前から聞こうと思ってたんですがツナさんのあれは一体・・・」

「あれは超死ぬ気モードつってなツナの潜在能力を引き出した状態だ。ツナが今飲んだ死ぬ気丸って薬を二つ服用することあの状態になるんだ。そしてツナの手袋はXグロブ、普段は毛系の手袋だがツナが死ぬ気モードになった事で変形するんだ」

「そうだったのか」

「にーさま！蟹さん達がこっちに来ます！」

蟹達がツナ達に襲いかかるだがツナが先に攻撃をする。

ドカアアッ

蟹の内一匹はツナの一撃で吹っ飛ばされ泡を吹いていた。

「は・・・速い！それも一瞬で倒しただと！」

オクタヴィアはツナの強さに驚く。蟹達はツナを攻撃したが全てかわされ3匹が返り討ちにあった。

「おおお！まるで蟹の動きが分かってるみたいだ！」

「すごい！まるでお話に聞いたジヨット様の戦い方だ！」

「どういうことだ？」

「ジヨット様は全てを見通す力を持っていると言い伝えられてるんです」

「全てを見通す力？」

「そうだぞ！あれこそツナに受け継がれたボンゴレ^{フリーモ}一世の力『超直感』だ！」

「超直感？つまり常人離れした直感ということか？」

「そういうことだ」

「じゃあ、ツナは直感で蟹達の動きを読んだってことか！？」

「そうだぞ！」

「にーさま、そろそろ私達も」

「ああ、みんなそろそろ俺達も戦うぞ！」

「」「」
「」
「」
「」

ツナ達が蟹狩りを終えて数時間が過ぎた。かなりの収穫であった。

「すごかったぞツナ！」

「すごいですツナさん！」

「さすがジヨット様の直系だね」

「やるではないか！」

「お見事でした！」

「みんなツナさんのおかげですよ」

「やったな、ツナ！」

「はい、アルサルさん」

その時である。

ドカアアアン

突然ツナ達の近くにあった岩が爆発したのであった。

「うわっ！なんだ？」

「アルサル上を見る！」

モルガンの言われた通りに上を見ると、そこには10体のストウラオ・モス力であった。

「こいつは確かストウラオ・モス力とかいう奴じゃないか！こんなにいたのか！」

「こんなのほんの一部にすぎませんよ」

突然、聞きなれない声がした。その声は上空には伊達眼鏡をしたミルフィオーレの制服を着た青年が飛んでいた。その足には紫色の炎が灯されていた。

「お前！ミルフィオーレだな！」

「いかにも、私はホワイトスペルのコダーディア。クルデルに変わリアヴァロンの占拠を任されたんですがまずあなた達を始末しようかと思いましてね」

「そう簡単に倒されてたまるか！みんな！」

「ふふふ、まさか私がそのための対策をねっていないとも思いますか？あなた達がここに来る前にちゃんと仕掛けておきましたよ、罠をね」

が何かの装置を出し、その装置のスイッチを押した。するとツナ達の足元から機械の腕がいくつも出てきてツナ達を手足を拘束する。ただしリボンだけはそれを逃れる。

「なっ！」

「これは！」

「きゃあああ！」

「うわあああ！」

「くっ！」

「はっ！」

「あわわ！」

「こ、これでは動けない！」

「どうした？罠はこれだけか？」

「つて、リボーンだけ逃れてる！」

「おつとアルコバレーノ、君の対策もあるんだよ」

コダーディアはボールをリボーン目掛けて投げリボーンは避けるがボールが爆発しガスが出てきてそのガスによってリボーンの様子がおかしくなった。

「こ・・・これはまさか・・・」

「リボーンの奴どうしたんだ？」

「あれってまさか・・・」

「そうですよ。あのガスには彼にとって有害である非？線が含まれてるのですよ。もっともあれだけの量では動きを封じるだけですがね」

コダーディアはスイッチを押し、リボーンもツナ達のように拘束される。

「くっ！」

「リボーン！」

「さてこれであなた達を思う存分・・・」
その時である。

ドカアアアアンツ

突然ストウラオモスカの内一体が爆発した。

「な・・・これは一体？」

第7話 狩り（後書き）

次回、絶体絶命のツナ達の前に現れたのは！

第8話 嵐の守護者

「ば・・バカな！なぜ爆発を・・・」

コダーディアはモス力が突然爆発したため茫然とした。その時向こうから誰かが来た。

「てめー、10代目に何しやる！」

現れたのは匣兵器ボックスを装備した獄寺であった。ちなみに肩には彼のアニマル匣である嵐猫の瓜が乗っている。ボックス ガッチャンベスタ

「獄寺君！無事だったんだ！」

「おい、あいつ一体誰だ？」

アルサルはツナに質問するがリボーンがそれに答える。

「奴の名は獄寺隼人、ツナの守護者の一人だ！」

「えっ！それじゃあツナさんの友達って」

「そうだぞ！あいつともう一人の守護者のことだ！」

それを聞いたスィールとラストイは目を輝かす。

「ボ・・ボンゴレの守護者ですって！」

「今度は守護者が現れるなんて！」

「お前ら今はそんな事を言ってる場合じゃないだろ！」

オクタヴィアが注意する。

「10代目、リボーンさん今そっちに来ます！」

獄寺はツナ達の処に向かおうとする。だが

「そうはさせるか！行けモス力達よ！」

コダーディアがモス力達を使ってそれを妨害しようとする。モス力の内一体が獄寺を攻撃する。

ドカアアン

「獄寺君！」

「ふふふ、これで・・・」

コダーディアは獄寺が今の一撃でやられたと思ったが
「なっ！」

獄寺は骨を模したパーツでできたシールドによって守られていた。

「うわっ！なんだあれ！」

「どうやら結界みたいな物らしいな」

獄寺はホバーに乗ってツナ達の処に向かって来る。

「うおお！今度は走ってもないのに速くなったぞ！」

「そうはさせるか！モス力共全員で攻撃し・・・」

だが獄寺は赤炎の矢を構えモス力達に目掛けてレーザーを放つ。それも枝分かれしたのであった。モス力達はそれを喰らい6体だけとなった。だがその内の3体は腕や足をやられていた。

「まだ終わりじゃねえ！」

今度はマシンガンのように撃ちまくりその内の一体がそれを喰らう。そして獄寺はそのモス力にとどめをさす。

「喰らえ！赤炎の雷！」
フレイム サンダー

赤炎の雷を喰らったモス力は爆発し、残りは5体だけとなった。

「す・・・すごい！」

「これがボンゴレの守護者の力か」

アルサル達がそう言っているうちに獄寺がツナの前に来ていた。

「待っててください10代目！今拘束を解きますから！」

だがその時！

ガッシャアアアン

「ふう、やっと壊れたあ！」

ラステイが拘束していた機械の腕を壊したのであった。それを見たツナと獄寺はアゴが外れるほど驚いていた。

「え・・・？」

「ま・・・マジかよ？」

それを見たコダーディアもツナ達同様に驚いていた。

「う・・・うそ・・・そんなバカな・・・」

「ラステイは鉱山妖精っていう妖精でかなりの怪力の持ち主だそう
だ」

「リボーン！知ってたのかよ！」

「オガムから聞いたんだ」

「さすがの僕もこれを壊すの時間がかかったよ！」

「ラストイ、早く俺達のも壊してくれ！」

「そうはさせません！」

コダーディアは匣兵器^{ボックス}を出し雲の死ぬ気の炎を注入する。中からバズーカが出てきた。

「モス力達！一斉攻撃！」

コダーディアとモス力達はツナ達に目掛けて攻撃するが獄寺のシールドで防御する。だがそれも時間の問題である。

「おい、早くしろ！このままじゃもたねえ！」

「分かってるよ！」

獄寺とラストイは急いでみんなの拘束を解こうとする。拘束はだんだん解けていき残りはデキムスのだけとなった。

「これで最後だ！」

ラストイはデキムスを拘束している機械の腕を壊す。

「よし！終わった！」

「よし！みんな反撃開始だ！」

「……応！……」

ツナは超死ぬ気モードになりアルサル達は武器を構える。

「くっ！こうなれば」

コダーディアは再び匣兵器^{ボックス}を出し雲の死ぬ気の炎を注入する。中から無数の怪物達が現れた。

「な、なんだこいつら！こんな匣見た事ねえぞ！」

「ふはははは！これこそ雲ゴブリンです！モス力達、雲ゴブリン達行きなさい！」

だがツナはナッツを出しツナの右手の甲に乗せる。

「ガオオオオオ！」

ナッツの雄叫びによって雲ゴブリン達は全員石化したのであった。

「うわああ！石になったぞ！」

「リボーンこれは一体？」

「大空の調和は周囲の環境と同化させる事ができるからな。それに
よる石化だ！」

「なるほど、あのような使い方があるのか」

「驚くのはここからだぞ！」

リボーンがそう言っているとツナは

「ナッツ、カンピオウフォーム モードアタック形態変化。攻撃形態」

「ガオオオオオ」

ナッツの姿は変わりガントレットへと姿を変えたのであった。

「一世のガントレット」

「なっ！ナッツが変身したあああ！」

アルサル達はナッツがガントレットになったのを見て驚く。ツナは
拳に死ぬ気の炎をため込みそれをモス力達に放つのであった。

「ビックバンアクセル！」

モス力達はビックバンアクセルを喰らい全滅したのであった。

「そ．．．そんな．．．」

コダーディアが驚いたその時目の前にある物が現れた。それは．．．
「こ．．．これは！」

8本位あるダイナマイトであった。

ドカアアアアアン

「ぎゃあああああ！！！」

ダイナマイトは爆発しコダーディアは爆発を喰らったのであった。
「てめーにはそいつで充分だ！」

第8話 嵐の守護者（後書き）

次回、アロウンはある物を取りに行く。

第9話 岬

「結局ツナとあいつが倒しちゃったな」

「そうだな」

モルガンとオクタヴィアはツナと獄寺を見てそう言った。ちなみにコダーディアは真っ黒になったあげく気絶しており、縄で縛られていた。

「よかったよ獄寺君が無事で、山本は一緒じゃないの？」

「ええ、気が付いたら森の中にいて俺だけでした。携帯も圏外で使えないし、おまけにイノシシに追われ、昨日から何も食ってなくてもう散々っスよ！ところで10代目さつきから気になってんですがあいつらは一体誰ですか？」

「ほお、はでにやったなあお前ら！」

向こうからアロウンとオガムが現れた。獄寺はアロウンの顔を見ると

「ああああ！あいつは！」

「ん？つてG！？」

「髪の色は違うみたいですがどなたですか？」

リボーンがオガムの質問に答える。

「こいつがツナが言ってたダチの一人でボンゴレ嵐の守護者の獄寺隼人だ！」

「なんと！ツナ殿が言ってたご友人というのは守護者の事でしたか！」

「ほほう、こいつがツナの守護者の一人か」

「10代目、これはいったいどういう事っスか？ミルフィオーレはいるし、夢に出てきたヤロウまで現れてどうなってるんですか？」

「落ち着いて獄寺君！今どういう状況か話すから！」

ツナが獄寺に事情説明をして

「なるほどそのような事が、おまかせください！10代目！10代目の右腕である俺が加わればミルフィオーレなんか目じゃねえっスよ！」

「ははは、今の嵐の守護者はボスにかなり忠実な奴だな。Gとは大違いだ」

「G殿もジョット殿の右腕でしたがあのような感じで接していませんでしたからな」

「あの、Gって一体誰ですか？」

リアンノンが質問しオガムがそれに答える。

「ジョット殿の守護者の一人ですよ。ジョット殿とは幼馴染で彼の右腕として補佐をしていました。あのゴクデラという方はG殿によく似ておりますよ」

「刺青と髪の色を除けばな」

「ところでアロウン、どうしてここに？」

「エドラムを取りに行こうと思ったならなにやら騒がしかったからな様子を見に来たんだ」

「ああ、そういえばあの岬に置いてったままだったな」

「あのエドラムって？」

「アロウンの剣の事だ前の戦いが終わった後必要ないから近くにある岬に置いて行ったんだ」

「よし、オガムとりあえずこいつをアヴァロンに連れて行け。ミルフィオーレについていろいろ聞きたい事があるからな」

「御意」

その時である。突然煙が出てきたのである。

「うわっ！なんだこれ！？」

「くっ、煙幕か！？」

煙は辺り一面に広がり視界が見えない状態になった。

「げほげほっ！みんな大丈夫か？」

「ええ、大丈夫です」

煙が消え、コダ・ディアは姿を消してしまったのであった。

「い、いない！」

「どうやら仲間がいたようだな」

「ちっ、逃げやがったか！」

「仕方がないさ、そろそろアヴァロンに戻るか」

「俺はエドラムを取りに行つて来る先に帰つてろ」

「分かった。みんな行くぞ！」

「あのアルサルさん」

「なあツナ、そのアルサルさんつてのはやめてくれないか。アルサルでいいよ」

「でも・・・」

「死ぬ気モードになつたお前を見るとどうも違和感があつてなあ。呼び捨てで構わないよ」

「同感だな。オレのこともアロウンで構わん！」

「おお、あたしの事もモルガンでいいぞ！」

「まあお前は堅苦しいところがあるからな。私もオクタヴィアでいい」

「ほら、みんなもこう言つてますし」

「・・・分かつたよアルサル。みんな」

「あいつら、10代目に馴れ馴れしくしゃがつて！」

「獄寺はダイナマイトを取り出す。」

「つてうわああ！あれは！」

「ひiiiiiiii！」

「わわわわわ！」

「あわわわ！ゴクデラさん落ち着いて！」

「わああ！獄寺君それ閉まつて！」

「獄寺はツナの言う通りにダイナマイトをしまう。」

「つたくおつかない奴だな！で、なんだツナ？」

「俺アロウンについて行くから先に帰つてて」

「なら10代目、俺も一緒に・・・」

「獄寺君はみんなといっしょにアヴァロンに行つて来てよ。俺は大

丈夫だから」

「10代目がそうおっしゃるなら・・・」

「おい、ゴクデラ早く来ーい！」

アルサルは

「けっ、てめえに言われなくても分かってる！」

獄寺はアルサル達について行きアヴァロンへ向かい、ツナはアロウンについて行き岬へと向かって行った。

「で、なんで俺について来るんだ？」

「いや、その岬つてのが気になって」

「なんだそりゃ？」

そして二人は岬に着いた。そこには赤い剣と石碑らしき物があつた。

「やつぱり！ここ夢の中に出てきた岬だ」

「昨日言つてた夢の事か？」

「俺、夢の中でこの岬でボンゴレ^{フリーモ}一世がアロウンともう一人と一緒にいるのを見たんだ」

「なるほど、恐らくそれはボンゴレリングが見せた記憶だろう」

「ボンゴレリングが？」

「ボンゴレリングの力の事は聞いているだろ？この世界での奴の記憶がお前の夢として見せていたんだ」

「アロウンと一緒にいた人は一体？」

「妖精王プイル。アルサルとリアンノンの先祖だ」

「アルサルとリアンノンの先祖！そういえばアルサルって誰かに似ていると思っただけ・・・」

「ああ、よき友だったよあいつは。ジヨットとも仲が良かったな」

「そうなんだ。ところであの剣がエドラム？」

「ああ、その通りだ」

アロウンはエドラムを引き抜き鞘に戻す。

「あれ？この石碑は？こんなの夢の中には出てなかったよ」

「俺が眠りについた時に造られた物だ」

「なんて書いてるの？」

「竜が舞い、巨人が踏みならし、妖精が歌い、人間が笑う地、まだ到来せぬ国、『アヌウブン』を見た大王、カエル・ミルディンにて、安らかな眠りに就かれんことを。これより始まる、長き旅路の果て、我もまた、この地に安らごう。かなうなら、いつか再びまみえんことを。かつてのように肩を並べ、共に戦う日を。この海が続き、大地が広がる限り、願っている・・・そう書かれている」

「それって詩？」

「そんなとこだ。さて、ツナそろそろアヴァロンに戻るぞ！」

「・・・うん・・・分かった」

ツナとアロウンはアヴァロンへ戻ったのであった。だがツナはある疑問を抱いていた。

（あの石碑に書かれている詩って・・・もしかして・・・）

第9話 岬（後書き）

次回、アヴァロンでの日常でツナと獄寺はある妖精に出会う。

第10話 ゲッド・ピープルズ

獄寺と再開した翌日

「ふあゝ、よく寝た」

ツナは眠りから覚める。その時ノックがした。

「どうぞ」

ドアが開き家付き妖精達が入ってくる。

「おはようございますツナ様」

「おはよゝ！」

「おはようリムリスさん、エルミン何か用？」

「実はお渡ししたい物がありまして」

「俺に？」

「どうぞ」

それはツナのいたの世界の服である。それも最初に10年後の世界に飛ばされた時のだ。

「えっ！この服！」

「ええ、リボンちゃんに頼まれて造った物ですよ」

「でもその服、俺が着ていた服とまったく同じなんだけど」

「それはですね・・・」

リムリスはある物を見せる。それは一枚の写真であった。その写真にはツナが映っていた。

「この絵を参考にしたんです」

「なるほど。あれ？まてよ、それじゃあ素材は？」

「リボンちゃんのペットのレオンちゃんの糸ですよ」

「レオンもがんばったんだよ」

「そっか、ありがとう二人とも。それにしてもすごいよ。ここまで忠実に造れるなんて！」

「おほめいただいて恐縮です」

「きょーしゅく、きょーしゅく！」

ツナは家付き妖精達に貰った服を着て場内を歩いていた。

「おはようございます10代目」

「おはよう獄寺君。あつ獄寺君その服！」

獄寺は元の世界の服を着ていた。ツナ同様最初に10年後に飛ばされた時の物である。

「ええ、リボンさんが家付き妖精達に造らせた物っス。やっぱり10代目も貰ってたんっスね！」

「そうなんだよ！後でリボンにもお礼を言わないと！」

「そうっスね！にしても今日は暇っスねえ。どうしますか？」

「そっちなあ・・・」

その時威勢のいい掛け声が聞こえた。

「っらしゃい、っらしゃい！皆様の道具屋グッドピープルズ大安売り中だよー！」

「ん？なんだろう？」

「行ってみましょう」

ツナと獄寺は掛け声のする場所に向かう。

「っらしゃい、っらっしゃい！よろず道具屋、グッド・ピープルズ、ただ今絶賛大安売り中だよー！」

そこには一人の少女が掛け声をだしていた。少女の後ろにある建物はどうやら店のようだ。

「よろず道具屋、グッド・ピープルズ？」

「道具屋なんてのがあったんっスねこの城塞都市」

「そこのお二人さん！ちよつと見ていかない？いろんなのがあるわよー！」

「行ってみようか」

「そうっスね」

ツナと獄寺が店の前に近づく、二人の顔を見た少女は驚く。

「ってあああああ！あんた達もしかしてボンゴレファミリー！」

「俺達の事知ってるの？」

「もうアヴァロン中噂になってるわよ！あんたがジヨット様の直系で次期ボスの人で隣がその守護者の人でしょ！」

「こいつ、10代目に向かって・・・」

「落ち着いて獄寺君！えっと・・・君名前は」

「エポナよ。行商妖精のエポナ。あんた達は？」

「沢田綱吉、みんなツナって呼んでる。こっちは獄寺隼人君」

「変わった名前ね。とりあえずうちの商品見ていきなさいよ」

「まあ、見るくらいなら」

「10代目がそうおっしゃるんなら」

ツナと獄寺は店の中に入りどのような商品があるか見る事にした。

「うわっ！いろんなのがあるんだね」

「そうよ！薬草や毒けし草、聖水なんでもありよ！」

（薬草に毒けし草に聖水って・・・）

「ん？なんだこりゃ？」

獄寺はある物を見つける。水が入った瓶である。

「おい、この瓶なんだ？」

「ああ、それね。それは飲むと力が湧き上がる力水よ。最近入荷したばかりなの」

「へええ、こんなのがねえ」

「じゃあこれは？」

ツナが出したのはローブであった。

「それは魔法使い用のローブよ。いろんな種類があってそれは賢者じゃなきゃ着る事が許されない品よ！」

「へええ、ん？あれは・・・」

ツナはある物を見つける。それは赤い靴であった。

「エポナ、この靴は？」

「おおお、さすがボンゴレ10代目！お目が高いわねえ！それは靴屋妖精組合推薦の、限定50足早いもの勝ち、超稀少品の魔法の靴よ！」

「魔法の靴！？」

「そう、なんと！履くと3倍のスピードで歩ける赤い靴！」

（・・・なんとか専用って感じなんだけど）

「今なら無料体験実施中だから履いてみない？」

「えっ！この靴を？」

「とーぜんじやない！履かないと効果がないんだから！」

「そこまで言うんなら・・・」

「10代目、俺が履きます！」

「獄寺君！」

「本当に3倍のスピードがでるのか俺が試しに！それに10代目になにかあったら」

「わ・・・わかったよ」

「それじゃあ一旦外に出ましょう！」

ツナ達は一旦店から出て、獄寺は魔法の靴を履いた。

「あんま普通の靴と変わんねえな」

「とりあえず走ってみて」

「はいは・・・」

獄寺が軽く走った瞬間、ものすごいスピードで吹っ飛び近くの建物にぶつかった。

「ご・・・獄寺君！！」

「ふががが」

獄寺は気絶していた。

「あちゃー、やっぱこうなっただか」

「って、こうなる事予想してたの！」

「当然よ、それよりあの靴汚れたから買い取ってちょうだい」

「え、ええええええええ！！俺達この世界のお金持ってないよおお

「おおー!!」

「だと思っただわ。それじゃあ働いて弁償するしかないわね」

「そ・そんな・・・」

「まあ、私の条件を引き受けてくれたらただにしていいいけど」

「条件？」

「そうよ」

「で、それがあれか？」

「そうらしい」

その翌日アロウンとアルサルグッド・ピールズの近くに立っていた。グッドピールではエポナが掛け声をあげていた。

「っらしゃい、っらしゃい！本日商品をお買い上げになったお客様にはボンゴレファミリーの10代目サワダ・ツナヨシとその守護者ゴクデラ・ハヤトのサイン入り色紙を1000名様にプレゼント」
エポナはサインを一人1000枚を書くという条件で魔法の靴を特別にただにしてもらった。ツナと獄寺は一晩で書き終え二人合わせて2000枚のサインを書いたのであった。ちなみにツナと獄寺はまだ寝ているのであった。

「エポナの奴最初からあれが目的で仕組んだんじゃないだろうな？」

「エポナならならありえるかもしれないな」

ちなみにグッド・ピールズの今回の売り上げ大成功だそうだ。

第10話 ゲッド・ピープルズ（後書き）

次回、山本の手がかりを入手する。

第11話 ロンディニウム

ツナ達が異世界に飛ばされ1週間が過ぎた。

ツナ達には広間集まっていた。

「えっ！山本の手がかりが見つかった！」

「ええ、先ほど手に入れた情報でそれらしい人物を見つけたと」

「それでどこにいるんだ？」

「情報によるとロンディニウムにいます。もともとロンディニウムのどこにいるかという情報までは手に入りませんでした。・

」

「ロンディニウム？」

「アルビオン島最大の交易都市です。元は帝国の交易都市でしたがアロウン様が市長になった事で今は自由交易都市となっております」

「えっ！アロウンが市長！」

「おい、このぐうたら魔王が市長で大丈夫か？」

「おい、ゴクデラ！誰がぐうたら魔王だ！」

「本当の事だろうが！」

「で、どうするんだツナ？そこに行くか？」

「他に手がかりがないし行くしかないよ」

「だろうな。よしお前ら準備が整いしだい出発するぞ！」

「……応！」「」「」

「だけどそのヤマモトってどんな奴だ？」

「そうだな、ツナそいつの特徴を覚えてくれないか？」

「それならアロウン様、リボン殿下からもらったこれがあります！」

オガムは懐からある物を取り出す。それは一枚の紙切れであった。だがその紙切れにはある人物が描かれていた。

「これがボンゴレ雨の守護者ヤマモト・タケシ殿です！」

その紙には山本の絵が描かれていた。

「なんだ、そんな物があるんなら早く出せよな！」

「ほほう、こいつ初代雨の守護者、アサリ・ウゲツに似ているな」
「それにしてもよくできた絵だな。まるで本物をそのまま写したようだ！」

オクタヴィアがそう言うとりボーンがそれに答える。

「それは写真っていつてな、実際の物をそのまま写した物だ！」

「そうなのか！やけにリアルだと思ったら」

「こいつらの世界の技術はよほど発達しているって事だ！」

「うわあああ、ここがロンディニウムか〜！」

ツナ達はロンディウムに到着した。ちなみに今回はツナ、リボーン、獄寺、アロウン、アルサル、リアンノン、オガム、モルガン、オクタヴィア、スィール、ラスティ、デキムスの12人だけ来ているのである。

「この街のどこかに山本がいるんだね」

「その通りです！」

「ここからは手分けして探すしかないな！」

「そうだな。そのほうが見つかる確率が高くなるからな」

「それじゃあ三つの班に分かれる事にしよう。まず一班は俺、アルサル、リアンノン、ツナ。二班はゴクデラ、オクタヴィア、モルガン、デキムス。三班はリボーン、オガム、スィール、ラスティ。この三つの班に分かれて探すぞ！」

「おい、なんで俺が10代目と一緒にないんだ！」

「ヤマモトって奴を知っているのはお前達3人だけだろ！班の中に知っている奴が一人入っていれば見つけやすいだろ！」

「ぐっ、た・・確かに・・・」

「獄寺君、アロウンの言う通りだよ！ここは」

「分かっています10代目！あいつの言うとおりにします！」

「決まりだな！」

「あっ！でも班のどれかが山本を見つけたらどうやって連絡する？」

ツナがそう言った時リボーンがそれに答える。

「それならこれがあるぞ！」

リボーンはツナと獄寺にある物を投げる。ツナと獄寺はそれを受け取る。

「あつ！」

「こ、これは！」

ツナが受け取ったのはヘッドフォン、獄寺はイヤホン型の通信機であつた。

「これ持ってたの！」

「当然だ！」

リボーンはそう言いながら獄寺と同じイヤホン型の通信機を付けた。

「おい、なんだそれは？」

「これは通信機っていつて連絡を取るための機械だ。遠く離れた場所でも連絡可能だ」

「お前達の世界にはそんな物があるのか！？」

「なるほど、それでヤマモトって奴を見つけたら連絡をするという訳か！」

「ツナさんのだけ形が違うようですが」

「ツナのは特別製だ」

「ああ、それで形が違ふんですね！」

その後ツナ達は三つに分かれて山本を搜索するのであつた。

それからしばらくして

「全然見つかりませんね」

「リボーン達の方も見つかってないって。これだけ探しても見つからないなんて・・・」

「情報はデマだったんじゃないのか？」

「あつ！獄寺君から通信が・・・えつ、山本が見つかった！」

「なんだって！それで一体どこに？」

第11話 ロンディニウム（後書き）

次回、アルサルがどういわけか山本に決闘を申し込む！

第12話 決闘

「なんでこうなつてんのおおお!!」

「うっ、やっぱり!」

「モくちゃん・・・」

「あああ、恐れていた事が現実・・・」

アロウンがそんな事を言っているトリボーン達がやって来た。

「おやおや、やけに騒がしいと思つたら・・・」

「あつ、オガム様!みんなも!」

「デキムス、この状況説明してくれないか?」

「はい、実は・・・」

それは獄寺達がこの店を見つけた時であつた。

「おおお、あんな所に酒場があるぞ!なあ、あそこに寄って行かねえか?」

「バカかお前!こんな時に酒を飲んでいる場合か!」

「でもあそこにヤマモトって奴がいるかもしれないじゃないか!」

「んな訳あるか!」

「そうだぞモルガン!そんな所にいる訳ないだろ!」

「行つてみないと分からないじゃないか!」

「どうせ酒が飲みたいだけだろ」

「なんだと!」

「3人共落ち着いて下さい!」

「仕方がない!そんなに言うなら店に入るぞ!」

「やったああ!」

「ちっ、しょうがねえな」

獄寺達は店に入った。店の中に入った。だがその店の店員の一人はなんと・・・

「いらつしゃい！」

探していた山本人であつた。

山本を見た獄寺達は目が点になっていた。

「えっ？」

「あれ？」

「あの方は・・・」

「う・・・うそだろ！」

「あれっ？獄寺じゃないか！元気だったか？」

「・・・本当にいたあああああ！！」

「ほ・・・ほれ見ろ！い・・・いたじゃないか！」

「うそつけ！」

「本当にいるとは！」

「獄寺、この人達は？」

「まあ、話せば長くなる。そういうお前は どうしてこんな所に？」

「俺ロンドンイニウムの近くに倒れてたみたいでさ、ここの店の人に拾われて世話になってんだ！」

その時店の主人の男が近づく。

「ヤマモト、そいつお前の友達か？」

「ああ、そうつスよ」

「おお、そうか！俺はこの店の店長バツカスだよろしくな！」

「いえこちらこそ・・・」

「店長、ちよつとこいつらと話がしたいんだけど」

「分かつたよ！俺とでなんとかするからゆつくり友達と話でもしとけや！」

「サンキュー！じゃあのテーブル空いてるからそこで」

「分かつた」

獄寺は空いているテーブルに座り山本に今までの事を話した。この世界の事、アロウン達の事、ミルフィオーレの事を、

「へええ、あの夢の中に出てきた黒い服の人がいるのか！おまけに初代のボンゴレファミリーと知り合いだなんてな！」

「俺もあいつを見た時は驚いたぜ」

「ところでこの人達は？」

「ああ、自己紹介がまだだったな私はオクタヴィアだ！」

「デキムスと申します！」

「で、こつちが・・・」

オクタヴィアがモルガンを紹介しようとするがモルガンがいなくなっていた。

「って、モルガンはどこだ？」

獄寺達が辺りを見回すとモルガンはカウンターに座っていた。それも酒を飲んでいた。

「ぷはゝ、ここの酒はうまいなあゝ！ひつく」

「こいつ、いつのまに！」

「こらっ！モルガン！勝手に酒なんか飲んで・・・」

「しかももう酔っ払っています！」

「ははは、おもしろい人だな！」

「おゝいラム、これを3番テーブルに」

「はゝい」

バツカスが呼んだのは獄寺や山本と同じくらいの少女であった。後ろから6歳くらいの少年と一緒にいてくる。

「ん？あの二人は？」

「ああ、店長の娘のラムと息子のキルシュだ」

「おお、そこのお前ゝ、あたしといっしょに酒を飲もゝぜ」

「えっ、いや私まだお酒は・・・」

「なんだゝ、あたしの酒が飲めないってかあゝ？いいから飲めゝ！」

「きゃあああ！！」

モルガンはラムに無理やり酒を飲ませようとする。

「ってモルガンやめろ！」

「うわあああ、ラム！」

「お、お姉ちゃん！」

「は・・・早く止めないと！」

「獄寺、俺達も！」

「待ってくれ！今10代目達に連絡してくる！」
「分かった！」

「という訳です」

「ったく、あのバカ！」

「っておい、早くモルガンを止めるぞ！」

「ああ、分かってる！」

それからしばらくしてモルガンを止めるのに20分もかった。そのモルガンは今すやすやと寝ていた。

「むにやむにや、もう飲めないよ」

「こいつ・・・のんきに寝てやがって（怒）」

「ははは、まあ落ち着けて獄寺！」

「で、お前がヤマモトだな。俺はアロウンだ」

「ああ、獄寺から聞いたよ。よろしくな！」

アロウンと山本がそう話しているとバツカスはアロウンを見てある事に気づく。

「あれ？あんた市長さんじゃないのか？」

「ん？そうだが」

「やつぱり！子供達と一緒に闘技大会観ていたよ！すごかったぜ！」

「へえ、あんた市長やってるんだ」

「まあな」

「なんか優しそうな人ですね」

「ゴクデラとは大違いだね」

スィールとラスティはそんな事を言っていた。

「おい、聞こえてるぞ！」

「はう！」

「ひい！」

「なありボーン、あのヤマモトって奴どんな戦い方をするんだ？」

アルサルはリボーンに山本がどんな戦い方をするのか質問してきた。リボーンはこう答える。

「山本は守護者の中でかなりの実力を持った剣士だぞ！剣ではお前を上回ってるかもしれないーな」

「なんだと！本当か？」

「ああ」

「おもしろい。おい、お前！」

「ん？あんたは？」

「俺の名はアルサル、お前に決闘を申し込む！」

「なあああああ！」

「ええええええええ！」

それを聞いたツナとリアンソンは驚く。

「アルサルてめえ、突然こいつに決闘を申し込むってどういうつもりだ？」

「こいつの実力が知りたいんでな、いいだろ？」

「ほほう、それもそうだな」

「アロウン様！」

「ヤマモト、こいつはゲール族っていう一族で一番強い戦士なんだが闘って見ないか？」

それを聞いた山本は目の色を変えた。

「へえ、おもしれえじゃねえか。いいぜその決闘受けて立つぜ！」

こうして山本はアルサルとの決闘に挑むのであった。

第12話 決闘（後書き）

次回、アルサルと山本の決闘の行方は・・・

第13話 雨の守護者（前書き）

今回はアルサルと山本をどんな感じで戦わせるか考えたため時間がかかりました。

第13話 雨の守護者

アルサルが山本に決闘を申し込んだためツナ達は場所を変える事になった。決闘の場所はロンディニウムの闘技場でやる事になった。ちなみに闘技場はアロウンの権限で貸し切りとなっているため闘技場にいるのはツナ達しかない。ちなみにツナ達は客席に座っていた。

アルサルと山本は互いに剣を構えていた。だが山本のそれは竹刀であつた。

「おい、まさかその棒がお前の剣だと言っくんじゃないだろうな？」

「ん？そうだけど」

「えええええ！」

「何を考えてるんだあいつ！あんなのを使ってどうする気だ！」

リアンソンとオクタヴィアは

「おい、お前本当にそいつで戦う気か？」

「ああ、早く始めようぜ！」

「分かった。なら始めるぞ！」

アルサルが先手を取り山本に剣を振るう。だが・・・

カキイイイン

「何！」

竹刀であつたはずの物が刀へと変わりアルサルの攻撃を防いだのであつた。

「これ時雨金時つってな普段は竹刀の状態だけど時雨蒼燕流っていう剣術を使うと刀に変形するんだ」

「おもしろい剣だな。これで対等に戦えるな」

「剣になつただと・・・あれは一体？」

オクタヴィアは山本の竹刀が刀に変形した事に驚いていた。リボー

ンがそれに答える。

「時雨金時、時雨蒼燕流を使う事で変形する刀で代々受け継いできた物だ」

「しぐれ・・そうえんりゅう？」

「俺達がいた世界で戦国時代と呼ばれた時代に生み出された殺しの剣技だ」

「こ・・殺しの剣！」

リアンノンはそれを聞いて驚く。

「ああ、完全無欠最強無敵の剣技で、その継承者は『最強』を謳い、それを狙う刺客から守り抜くことを宿命付けられると言われている」

「あいつはその継承者ということか。私も今度手合わせをしてみようとするか」

「奴もかなりの腕を持つ剣士のようなだ」

「ええ、ウゲツ殿を思い出しますよ」

「そのウゲツという人はどんな方だったんですか？」

「誰もが認めるほどの剣の腕前を持っていましたが、彼は音楽をこよなく愛し、自身の剣は持たなかったそうです。ですがジョット殿の危機を聞きつけた際には自分の大切な楽器を何もためらいもなく売り、それを手元に旅費と剣を4本用意してジョット殿の元に駆けつけたそうです」

「よほど信頼してたんですね」

「ええ、彼にとってジョット殿は遠い異国の友でしたからな」

「時雨蒼燕流、攻式一の型」

山本がそう言うのと山本は刀を両手で持ち突進しアルサルに突く。

「車軸の雨！」

アルサルは避けるが

「時雨蒼燕流、攻式一の型から五の型」

「何！」

山本は刀を素早く持ち替え、斬撃を放つ。

「五月雨！」

「ぐっ！」

アルサルは避けるが少しかすった。

「時雨蒼燕流、攻式五の型から特式十一の型」

今度は連続で鋭い突きを放つ。

ベツカタ・ウヰンディネ
「燕の嘴」

「うわっ！」

アルサルは山本の攻撃を剣でガードする。

「はあああああああ！！」

「やあああああああ！！」

アルサルと山本は

「やるじゃないかお前！」

「はは、あんたもな！」

「だがまだ力を隠しているようだ。全力でかかって来い！死ぬ気の炎を使っても構わん！」

「って、正気かあんた！」

「お前も使えるんだろ死ぬ気の炎？出して見る！」

「・・・分かった。ほんの少しだけ見せてやるよ！」

山本は二つのリングをはめ死ぬ気の炎を宿す。青い死ぬ気の炎だ。

その内の一つのリングは燕へと姿を変え、刀の刀身には青い死ぬ気の炎が灯されていた。

「それがお前の匣ボックスとやらか？」

「ああ、小次郎って言うんだ。あともう一匹いるんだけどこいつだけで充分だ！」

「ほう、たいした自信だな。ならばかかって来い！」

「見せてやるぜ。時雨蒼燕流、特式十の型！」

「（・・・来る！）」

ロンドン・オネジヤイ
雨燕の小次郎が前衛に構え、山本は水をえぐるように巻き上げながらアルサル目掛けて突進する。

スコン田苗ヲネ

「燕特攻！！」

「負けてられるか！うおおおおおお！！」

アルサルも山本目掛けて突進し互いに剣を交える。

カキイイイイン！！

「ぐっ！」

「っ！にっさま！」

山本はアルサルの左脇腹を攻撃したのである。ただし刀の峰で攻撃したため峰打ちである。

「俺の負けだ。たいした奴だよお前」

「ああ、親父から受け継いだ完全無欠最強無敵の剣だから負ける訳にはいかなーからな！」

山本とアルサルは互いの実力を認め合い握手を交わした。

「そんじゃ店長、ラム、キルシュそろそろ俺行くよ」

「ああ、達者でな！」

「ヤマモトさんお元気で！」

「お兄ちゃん、また会えるよね？」

「ああ、いつか遊びに来てやるからな」

「うん！」

「じゃあな」

「バイバーイ！」

山本はバツカス達と別れを告げ、ツナ達の元に駆けつける。

「よう、待たせたな！」

「よし、アヴァロンに戻るぞ」

「アヴァロン？」

「アロウン達の城の事だよ」

「へえ、城か。どんな城か楽しみだな！」

アロウン達は山本を連れアヴァロンへ戻るのであった。

第13話 雨の守護者（後書き）

次回、リボーンがツナ達を鍛え上げる。

第14話 リボーンのテスト 前篇

山本がアヴァロンに来て3日が過ぎたある日。

「ふんっ！ふんっ！」

ブンッ！ブンッ！

山本は泉の近くでバットの素振りをしていた。ちなみに山本はレオンの糸で造った服を着ていた。

「おや、ここにおられましたか！」

「ん？」

オガムが山本の所に近づいて来た。

「どうしたんすか？」

「リボーン殿が皆を集めてくれと頼まれましてな。城館の前の広場に集合してくれと」

「分かった！教えてくれてありがとうな！」

「全員集まったようだな！」

城館の広間にはリボーン、ツナ、獄寺、山本、アルサル、リアンノン、モルガン、オクタヴィア、スィール、ラストイ、デキムス、そして新米の兵士8人が集まっていた。ちなみにこの新米の兵士8人は第5話でオクタヴィアと一緒に戦っていた兵士達である。

「今回みんなに集まってもらったのはその新入りの兵士達のテストとこれからのミルフィオーレの戦いに備えてオレが直々にお前達を鍛えてやる！」

「リボーンが俺達を！」

「って、新入りのテストってなんっスかりボーンさん？」

「ああ、こいつらどうも俺に弟子入りしたいらしい」

「なっ！リボーンに弟子入り？」

「ああ、前から俺に弟子入りしてーらしく何度も頼んでいてな、今

回のテストで合格したら弟子入りさせてやる事にした」

「そうなんだ」

「ところでお前らの名前まだ聞いていなかったな。なんて名前だ？」
リボーンの問いにまず最初に剣を持った真面目そうな男である。

「私はグラーヴェ。剣士であります！」

次に槍を持った調子よさそうなオレンジ色のトンガリ頭の少年である。

「俺はニツク。騎士をやっているぜ！」

その次はハンマーを持った体格の良いごつい男である。

「オレ、アスポロ。重戦士！」

その次は剣を持った少女である。

「あたしはカーヤ。と同じ剣士よ！」

その次は弓を持ったカーヤそっくりの少女である。

「カーヤの双子の妹のマーヤです！狩人をやってます！」

その次は黒いマントを羽織った少年である。

「僕はマジア。ドルイドをやっているよ！」

その次は白いマントを羽織った白い髪の少女である。

「私は巫女のシルヴィだ。よろしく頼む！」

そして最後は赤いマントを羽織ったツインテールのツリ目の女である。

「歌い手のディーヴァよ」

「自己紹介は終わったな。それじゃあ、始めるとするか！」

「一体何をするんですか？」

リアンソンはリボーンに何をするのか質問する。

「ああ、まずはみんなにこれを渡す」

リボーンがみんなに渡したのは紙であった。その紙を見るとどうやら地図のようである。

「これはアルビオン島の地図じゃないか！」

「バツ印があるが・・・」

「お前らにはそのバツ印の処に行ってもらっ

「一体何があるんだ？」
「行けば分かる」

ツナ達は地図に書いてあるバツ印の処へと向かった。

「地図によるとこのあたりのはずだ！」

「ここって古森ですよね？」

「ああ、そうなんだが・・・ん？」

アルサルはある物を見つける。それは看板であった。当然この世界の文字で書かれている。

「なんだこの看板？」

「何か書いてあるけどなんて書いてあるの？」

「落イノシシ注意！なんじゃこりゃ！？」

「落石ならともかく、落イノシシだと！馬鹿げたイタズラだな！」

アルサルとオクタヴィアがそのような事を言っている間ツナ達はあの事に気づく。

「ねえ、前にもこんな事があったよね？」

「ええ、確かこれはあの時の・・・」

「つてことはまさか・・・」

ツナ、獄寺、山本は空を見上げた。

「おい、お前ら本当にイノシシが降ってくると思っているのか？そんな事ある訳が・・・」

だがその時である。

「あああああ、アルサル上を見る！」

「ん？・・・あ、あれは・・・」

アルサルが空を見上げると目を疑う光景が目に入った。それは・・・

「い・・・イノシシだあああああああ！！本当にイノシシが降って来たあああああ！！」

それも一頭だけではない、十頭くらいが降って来たのであった。

「ええええええええええ！！？」

「ば、バカな・・・こんな事が・・・」

「おおお、大量だぞ！」

「ど、どうなってるんですかこれええええ!!」

「ひえええ、なんでイノシシが!？」

「こ、これは一体・・・」

「なんと!!」

「おおおお、すげえええ!!」

「イノシシ、いっぱい!!」

「冗談でしょ!？」

「ひいいい!!」

「こ、こつちに落ちてくる!!」

「みんな早く逃げて!!」

「ちよっ!うそでしょ!？」

アルサル達が驚いている間にイノシシは地面に落ちてきた。

「ブヒイイイイ!!」

落ちてきた十頭のイノシシは立ち上がりアルサル達に突進してくる。

「うわあああ!イノシシがこつちに来る!!」

「ていうかよく無事でいられたなあイノシシ達!!」

「そんな事言ってる場合じゃないでしょ!!」

「とりあえずやつつけるぞみんな!!」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

「ってアルサル!またイノシシが降って来た!!」

「何いいいいい!!」

上を見上げるとさらに十頭のイノシシが降って来たのであった。

「一体どうなってるんだあああああ!!」

古森からアルサルの絶叫が響いた。

第14話 リボーンのテスト 前篇（後書き）

次回、リボーンのテストはまだまだ続く。そして、ある男がツナ達の前に現れる。

第15話 リボーンのテスト 後篇

アルビオン島にある古森。そこでツナ達は大量のイノシシ達の相手をしていた。

「よし、こいつで最後だ!」

カキイイイイイイイイインッ

「ブヒイイイイ!」

アルサルの一撃で最後の一頭が倒される。

「おおお、イノシシがいつぱいだぞ!」

「食料の調達!」

「でもなんでイノシシが降って来たんだ?」

「これがリボーンの言ってた訓練じゃないのか?」

その問いにツナが答える。

「そうだよ。前にも同じ事があったから」

「前にもイノシシを?」

「いや、あの時は熊だったよ」

「えっ、熊!」

「マジかよ!」

「あの時は逃げるのが精一杯だったよ!」

「リボーンの奴なんてものを特訓に使うんだ!」

アルサルがそう言っている間、獄寺は考え込んでいた。

「ん?どうしたゴクデラ?」

「いや、今回の特訓についてな・・・」

「今回の特訓?」

「ああ、今回の特訓デスマウンテンの訓練だ!」

「デスマウンテン!?なんだそれは?」

「ボンゴレの秘密特訓場だ!その厳しさは世界一と言われていて、生きて帰れるのは百人に一人だとか・・・」

「ひゃっ、百人に一人!」

「ひいいい、今回の訓練そんな恐ろしい所の！」

「こ、怖いよおお!!」

スィールとラストイが怯えている時オクタヴィアは看板を見つける。

「おい、あそこに看板があるぞ！」

「あ、本当だ！」

その看板には矢印が入っていた。左方向である。

「左へ曲がれだってよ！」

「ん？泉の方向じゃないか！」

「あれ？」

「げっ！」

「ん？あれは・・・」

ツナ、獄寺、山本の三人が泉の方向を見るとそこにある生き物がいた。それは・・・

「ゲコ、ゲコ」

大量の巨大な蛙であつた。

「な、何あれ!？」

「でっけえ蛙だなあ！」

ラストイがそれに答える。

「あれはエツヘウシユカ。神の重力グラヴィタスの影響で生まれた怪物だよ」

「神の重力？なんだそれ？」

「妖精族や古い種族しか効かない瘴気のようなだよ。寿命を縮めたり、子供を生まれなくしたり、無害な生き物を凶暴な怪物にしたりするんだ！」

「あの蛙はそいつで怪物になった訳か」

「おい、みんな泉の方をしてみる！」

「ん？」

ツナ達は泉の方向を見る。そこにはリンゴの木があつた。よく見ると看板が設置されていた。

「あそこに行行って事かな？」

「よし、みんな行くぞ！」

「あ、あのエツヘウシユカ襲って来ませんか？」

「襲って来るぞ！」

「やっぱり・・・」

「ほら、行くぞツナ！」

ツナ達はなんとかエツヘウシユカを倒してリンゴの木のある所に着いたのであった。

「また食料が増えましたね。にーさま！」

「つてあれ食べるの！？」

「げっ！」

「ていうか食えるのかこいつら？」

「り、リアンノン。さすがにこいつらを食うのはちょっと・・・」

「好き嫌いはいけませんよ！」

「・・・」

「おい、この看板見てみる！」

ツナ達はモルガンの言われた通りに看板を見た。看板にはこう書かれていた。

「リンゴに注意？」

「なんでリンゴ？」

「このリンゴの木の事でしょうか？」

その時であった。

ピュウウンッ

「ぐへっ！」

「え？」

突然何かが通り抜け、それがニツクの顔面にぶつかる。

「な、なんだよおい！？つてリンゴ？」

ニツクの顔面にぶつかったのはリンゴであった。そして次の瞬間。

ドババババババババ

「うわああああ！！！」

「きゃあああああ!!」

「な、なんだああ!!?」

なんと大量のリンゴがツナ達目掛けて飛ばしてきたのであった。

「いだだだ!!」

「わわわわ!!」

「ひいひい!!」

「ええい、切りが無い!!みんなやるぞ!!」

「!!」

アルサル、オクタヴィア、グラヴィエ、カーヤ、山本は剣で、スイール、デキムス、ニツクは槍でリンゴを真つ二つにし、ラスティ、アスポロはハンマーでリンゴをふっ飛ばし、モルガン、マーヤ、獄寺は素早く避け、マジア、シルヴィ、ディーヴァは風の魔法でリンゴを飛ばすのであった。

「わあああああ!!」

「あわわわ!!」

ただしツナとリアンノンは避ける暇がなかった。

「リアンノン、ツナ!!」

「俺に任せろ!!」

獄寺がダイナマイトを出し導火線に火をつけた次の瞬間。

ビュンッ

「ん?」

ドオオオオンッ

「ギヤアアアア!!」

巨大なリンゴが獄寺にぶつかり、獄寺の持っていたダイナマイトはツナ達の足元に散らばる。

「いつ!!」

「こ、これは・・・」

ドカアアアアンッ

ダイナマイトは爆発しツナ達は黒こげとなった。

「ががががが」

「ユリユリ」

「だれしねー奴らだな」

リンゴの木からリンゴの格好をしたリボンが現れた。

「リボン」

「この程度でボロボロになってちゃ特訓にならねーぞ！」

「おお、お前ら黒こげだなあ！」

向こうからアロウンやオガム、それにゲールの戦士達が近づいてきた。

「アロウン様！みんなも！どうしてここに？」

「様子を見にただけだ！」

「ええ、私達も気になりましたな」

「あ、あのリボンさん。それでテストは……」

シルヴィはリボーンにテストは合格かどうか質問した。

「何言ってやがる。特訓はまだ終わってねーぞ！」

「つて、ええええええええ！！」

「そ、そんなああああ!!」

リボーンの特訓はまだ続いたのであった。

特訓を終えたツナ達はアヴァロンへと戻る。その城門の目前に近づいていた。

「や・・やつと着いた・・」

「とんでもない特訓だったなあ」

その時である。

♪ ♪

ん?

どこからか音色が聞こえてきた。

「なんだろうこの音？」

「音色ようですが・・・」

「豎琴だなこりゃあ！」

「にーさま。この音色・・・」

「ああ、あいつだ！帰って来たんだ！」

アルサルがそう言うとその音色はだんだんこちらに近づき、やがてその音色を奏でている人物が現れた。豎琴を持った金髪の男であった。その男の後ろから黄色いドラゴンがついて来ていた。

「やあ、みんな無事のようだね！」

「ガウガウ」

第15話 リボーンのテスト 後篇（後書き）

次回、ボンゴレファミリーについて語り合う。

第16話 吟遊詩人

ツナ達の前に現れた金髪の男。その正体は……

「タリエシン！帰ってたのか！」

「お久しぶりですね」

「帝国が侵略行為やってるっていうからね、詩を造る暇じゃないから急いで戻って来たんだ」

「って、遅すぎるんだよ！」

「それでも急いで来たんだよ」

タリエシンと呼ばれた男はアルサル達の知り合いのようだ。

「誰だあのすかした野郎は？」

獄寺の問いにアロウンが答える。

「奴は俺達の仲間で吟遊詩人のタリエシンだ」

「あんなのがねえ……」

「ところで吟遊詩人って？」

ツナはアロウンに吟遊詩人が何なのか質問する。

「知らんのか？吟遊詩人と言うのは各地を旅する詩人の事だ」

「へええ」

ツナ達がそのようなやり取りをしている間タリエシンはツナ達の存在に気づく。

「おや、見慣れない顔だね。誰だい君たちは？」

タリエシンはツナ達が何者か問う。

「あ、どうも。俺は沢田綱吉。みんなからはツナって呼ばれてます」

「獄寺隼人だ」

「俺は山本武。よろしくな！」

「名前と服装からして外国人だね。どこから来たんだい？」

「ああ、タリエシンその事なんだがな……」

アルサルはタリエシンに事情を説明した。

それから数分後・・・

「そうか、彼らがボンゴレファミリーか」

「えっ！ボンゴレを知ってるんですか！？」

「アルビオンに伝わる古い伝承に彼らの事が語られていたからね」

「その伝承というの詳しく聞かせてもらえねーか？」

リボーンはいつのまにかツナの肩に乗ってタリエシんに質問した。

「り、リボーン！いつのまに！」

「おや、赤ん坊が喋っている。誰だい君？」

「俺の名はリボーン。こいつの家庭教師だ！」

「へえ、嘘ではなさそうだね。普通の赤ん坊とは思えない」

タリエシンはリボーンが普通の赤ん坊ではない事を見抜いたようだ。

「で、その伝承というのは？」

「ああ、そうだったね。このアルビオンには妖精王プイルの伝承があつてね彼と共に戦った者達の中に異世界からやってきた人間達がいたんだ」

「それがボンゴレファミリーって訳か」

「その通り。全てを包み込む大空と呼ばれた男ジョット率いるボンゴレファミリーは妖精王プイルと共に戦い、古の大戦争に勝ったと伝えられている」

「古の大戦争・・・」

「そんなもんがあつたのかよ」

「アロウンの方が詳しいはずだ。彼もプイルと共に戦った一人だからね」

「そう言えばそうだったな」

「ボンゴレ一世と一緒に戦っていたからな」

「それにしても妖精王の直系の次はボンゴレ一世の直系とはねえ、しかも彼で10代目かあ。ところでその二人が君の守護者かい？」

「ったりめーだ！俺は10代目の右腕にして嵐の守護者だ！」

「俺は雨の守護者だぜ！」

「嵐に雨か。残りの3人の守護者にも会ってみたいね」

「って残り3人だあ？何言ってやがるあと4人の間違いだろ？」

「おや、ボンゴレの守護者って6人だったのかい？」

「ああ、獄寺君達にはまだ言ってなかったね。ボンゴレファミリーがこの世界に飛ばされたのはD・スピードが裏切った後なんだ」

「えっ！そうなんすか？」

「裏切った！それってどういう事だ？」

「そのままの意味だ」

アロウンがその問いに答える。

「ジョットから聞いたことがある。6人目の守護者 D・スペード
デイモン
はボンゴレを裏切ったらしい」

それを聞いたアルサル達は驚く。

「え、ええええええ！」

「なんだと！本当なのか！？」

「ああ、最初は奴に賛同してボンゴレに入ってたがいろいろあつたらしい」

「一体何があつたんだ？」

「さあ、ジョットはそこまでは話さなかったよ」

「そっか……」

「なるほど、それで6人のはずの守護者が5人しかいなかったのか」アロウン達がそのようなやり取りをしている間タリエシンはツナ達の指に嵌めている指輪を見つめていた。

「ところで君達の指にはめているのはもしかしてボンゴレリングかい？」

「えっ、そうなんです……」

「やっぱり、見せてもらえないかい？」

「はい、獄寺君、山本ボンゴリングを」

「10代目がそう言うんなら……」

「いゝぜ、ほら！」

獄寺と山本はツナにボンゴレリングを渡し、タリエシンに3つのボ

ンゴレリングを渡す。タリエシンはボンゴレリングを見つめこう語る。

「伝承に聞いた通りの形だ！なかなかの指輪だね！」

タリエシンはそう言うツナにボンゴレリングを返す。

「でも、こう簡単に大事な物を初めて会う人間に易々と渡すのはちよつとねえ、僕が帝国のスパイだったらどうする気だい？」

「いや、アロウン達の仲間だから大丈夫だろうと思って、それになんとかそういう事をする人じゃないと思った訳で・・・」

それを聞いたタリエシンは啞然としたがなぜかほほ笑んだ。

「なるほど、さすがジョットの直系だね。彼は直感で全てを見通す力があると聞いたことがある。君にはその力を受け継いでいるようだね」

「まあ、たいていの事なら・・・」

「さて、そろそろ城に戻るぞお前ら！」

「あ、分かった！」

「ところでアロウン、みんなボロボロだけど何があつたんだい？」

タリエシンはアロウンにツナ達がボロボロになった理由を聞く。

「今日リボーンがこいつらに特訓させてこの様だ！新米の兵士たちにテストを含めてな」

「テスト？」

「ああ、もしテストに合格したら弟子入りさせるって言ったそうだ」

「で、合格したのかい？」

「一応合格だよ」

「一応？」

「まだまだ未熟なところはありますが鍛え上げればかなりの実力を得るだろう。この世界にいる間に鍛え上げるそうだ」

「なるほどね」

そのようなやり取りをしながらアロウン達は城門に入っていくた。

第16話 吟遊詩人（後書き）

次回、ミルフィオーレの新たな資格によって絶体絶命に！その時、ある男が現れる！

第17話 絶体絶命

タリエシンがアヴァロンに戻ってしばらくたつたある日のこと。ツナ達は古森でイノシシ狩りをしていた。ちなみに狩りに参加しているのはアロウン、アルサル、リアンノン、モルガン、タリエシン、デキムス、ツナ、獄寺、それにゲールの戦士数名であった。オクタヴィアは子供達に剣の修行をさせており、リボーンは新米の兵士達の特訓をさせており、スィールは牛の乳搾り、ラスティは武器屋の仕事、山本はなぜかエポナの手伝い、オガムはミルフィオーレについて調査に出かけたため参加していない。

「イノシシ出て来ーい！」

「イノシシ食うぞー！」

アルサルとモルガンは張り切っていた。

「ったく、張り切りやがって・・・」

アロウンはツナと獄寺を見る。なんか元気がないようだ。

「どうしたお前ら？」

アロウンは二人に話しかける。

「もう、イノシシはこりごりなんですけど・・・」

「俺もつす10代目・・・」

「ああ、あの特訓のせいかな」

ツナと獄寺が元気がないのは前のリボーンの特訓のせいのようなのだ。

あの特訓のせいでイノシシにはうんざりしているようだ。

「俺の場合はそれだけじゃねーよ。この世界に飛ばされた最初の日

イノシシに追いかかれたからな・・・」

「そういえばそんなこと言ってたね」

「彼も大変だったんだね」

「っるせえ！」

「でもタリエシンまで狩に参加するなんてね」

「まあ、暇つぶしにはちょうどいいからね」

その時である。

「ん？」

「なんだ？」

アルサル、モルガンは何かに気づく。

ザッザッザッザッ

それはたくさんの足音であった。それもこっちに近づいていた。

「アロウン！」

「ああ、分かつてる！」

「10代目！」

「何か・・・来る！」

向こうからだんだんと足音が聞こえてきた。やがてその足音の主達が現れる。

「なっ！」

「あ、あいつらは！」

それは帝国の兵士を含めたミルフィオーレの部隊であった。それかなりの数だ。

「ミ、ミルフィオーレファミリー！」

「へえ、彼らがミルフィオーレファミリーか」

部隊の先頭に立つ40代位の髭を生やした男が喋りだす。

「ふっ、情報通りだな！」

「よう、貴様ら最近襲ってこないからあきらめたと思ったぞ！」

アロウンは気軽に男に話しかける。

「事情があつてそっちに行けなかったんでな。俺はホワイトスペルのミドリーフエ。アヴァロンの占拠と貴様らを始末しろと命令されて来た者だ！まずはお前達を始末するとするか。全員構え！」

兵士達は言う通りに武器を構える。中には匣兵器ボックスを構えている者もいた。

「あれが死ぬ気の炎と匣ボックスか。なかなかの物だね！」

タリエシンは死ぬ気の炎と匣ボックスの事はツナ達から聞かされていたが、実際見るのは始めてだ。タリエシンは始めてみる死ぬ気の炎と匣ボックスを見て感心する。

「って感心してる場合じゃないだろ！全員戦闘体制に入れ！」

アロウンはタリエシンに怒鳴りツナ達に戦闘体制に入るよう命令した。アルサル達は武器を構え、ツナは超死ぬ気モードハイパーボックスになり獄寺は匣を装備した。

「へえ、話には聞いていたけど本当に別人みたいになるんだ」

タリエシンは今度は超死ぬ気モードハイパーになったツナを見てそう言った。

「だから感心してる場合じゃないだろ！行くぞ！」

アロウン達はミルフィオーレの部隊と戦うのであった。

戦いから数時間が経過した。ミルフィオーレの部隊のほとんどが（ミドリーフェ）全滅し、状況はアロウン達の有利となっていた。

「はあ、はあ、あと少しだみんな！」

「……応……！」

「はあ、はあ」

ツナはすでに元に戻っており、かなり疲れていた。

「大丈夫っすか10代目！？」

「後は俺達にまかせて休んでろツナ！」

だがアロウン達もかなり疲れているようだ。その時ツナは疑問を抱いていた。

（なんだ？何かおかしいぞ？）

ツナがそのような事を考えている時であった。

「そろそろだな！」

「何！」

ミドリーフェは突然指を鳴らす。そして向こうから何か聞こえてきた。

ザッザッザッザッ

「こ、この音まさか！」

向こうを見ると別の部隊がこっちに近づいていた。それも先ほど戦っていた部隊と比べると数はあちらの方が上だ。

「そ、そんな。他にもいたのか!？」

「そういう事か。通りで手応えがないと思ったら、さっきの連中は前衛にいた予備兵、向こうから来るのが本陣って事か！」

「なんだと！」

「ふはははは、その通りだ！貴様らを疲れさせるための作戦は大成功だな！まあ、結構手こずったがな」

「仕方がない！お前ら、ここはいったん引くぞ！」

「そうはさせねえ！」

ミドリーフェはまた指を鳴らす。そして・・・

ザッザッザッザッ

アロウン達の後ろから別の部隊が近づいていた。

「しまった！他にもいたのか！」

「すでに貴様らを始末する作戦は練っていたのさ！」

ミドリーフェそう言いながらリングから死ぬ気の炎を出した。晴れの炎である。ミドリーフェはそれを匣ボックスに注入した。

「ビックランチャー！」

かなり巨大なランチャーが匣ボックスから出てきた。

「な、なんだあれは!？」

「まあ、超特大の超強力な弓矢みたいなもんさ。喰らいな！」

ミドリーフェはランチャーをアロウン達に向けたその時である。

ピカアアアアッ

「な、なんだ！」

突然目の前が光り始めたのであった。

「ま、まぶしい！」

やがて光は消えアロウン達の目の前に見慣れない男が現れた。

「だ、誰だあいつは！？」

だがツナと獄寺はその男を見ると驚愕した。

「えっ！」

「あ、あいつは！」

やがて男は大声でこう叫んだ。

「極限にここはどこだあああああ！？」

第17話 絶体絶命（後書き）

次回、ミドリーフェとの戦いに決着！

第18話 晴の守護者

突如アロウン達の前に現れた男の名は笹川了平。ボンゴレファミリーの守護者の一人、晴の守護者である。

（ん！？こいつ顔がナツクルに似てるぞ！……まさか！）

アロウンは了平の顔を見て彼もボンゴレの守護者ではないかと思つた。それもそのはず。ツナ、獄寺、山本はボンゴレ^{フリーモ}一世や初代ボンゴレの守護者に似ていたためそう思うのも無理はない。

「きよ、京子ちゃんのお兄さん！」

「芝生！なんでてめえがここに！？」

了平はツナと獄寺の声を聞きその存在に気づく。

「おお、沢田にタコ頭ではないか！探していたぞ！お前達一体今までどうに？」

了平はツナ達にどこへ行つたのか質問したその時、ミルフィオーレの内5人が了平に襲い掛かる。

「お、お兄さん後ろ！」

ん?

「死ええええ！」

ミルフィオーレの5人は了平を襲う。だが……

「ぐはっ！」

一人はジャブを喰らい。

「があつ！」

もう一人はアッパーを喰らい。

「ぼへえっ！」

もう一人はカウンター。

「おぶぶ！」

もう一人はフック。

「げほおお!!」

最後の一人はストレートを喰らった。

「いきなり何をする！」

ミルフィオーレの5人はあっけなく了平に倒されてしまった。

「す、すごい！」

「何者だあいつは？」

アルサル達がそう言っている間ミドリーフェは了平を見てある事に気づく。

「そうかどこかで見た顔だと思ったら、貴様ボンゴレ晴の守護者笹川了平だな！？」

「ん？いかにもそうだが」

それを聞いたアルサル達は驚く。

「ぼ、ボンゴレの守護者！？」

「やはりそうか・・・」

アルサル達が驚いている間、了平はミドリーフェ達を見てある事に気づく。

「ん？あああああ！貴様らよく見たらミルフィオーレではないかああ！なぜここにいる！？」

「って今頃気がついたのかよ！？」

「貴様ら一体何を・・・」

「見て分からないか？今からそいつらを俺達が皆殺しにするとこなんだよ！」

「なんだと！そうはせんぞ！」

「安心しろ。お前も道連れだ喰らえ！」

ミドリーフェはビックランチャーを了平に向け発射する。

「危ない！」

「お、おい！避ける！」

だが了平はそのまま立ったままで右手の拳に集中させ、そしてそのまま一気に拳を放った。

マシマヤノン
「極限太陽！！」

了平の必殺技”極限太陽”によりミドリーフェの放ったランチャー攻撃を防いだのであった。

「・・・・・・・・・・っ！」

「うそ・・・・・・・・だろ!?」

「な・・・なんて力だ!!」マシマヤノン

アロウン達は了平の極限太陽を見て相当驚いていた。

「くっ、やるな!だが・・・」

ミドリーフェはフレイムFシューズを使って空を飛んだ。

「ふっ、ここまでこれるかな?」

「ならば俺も!我流!!」

了平はアニマルリングに晴の炎を注ぎ、晴カンガルーの漢我流かんがりゅうを出した。

「うわっ!なんだあれ!?!」

「あれがあいつのボックス匣兵器なのか?」

「ああ、あいつのボックス匣兵器晴カンガルーver・Vの漢我流かんがりゅうだ!」

「か・・・かんがりゅう・・・」

「我流、晴グローブと晴シューズを!」

我流の腹の袋から了平の武器、晴グローブと晴シューズが出てきて、それが了平の両手と両足に装着される。そして了平は晴シューズによって空を飛んだ。

「うおおおおおおお!!」

了平はミドリーフェ目掛けて飛び上がったのであった。

「と・・・飛んだ!」

アルサル達が驚いている間ミドリーフェはビクランチャーを了平目掛け狙いを定める。

「さあ、今度こそ喰らいな!」

「同じ手が通用するとも思っているのか!」

「さあ、それはどうか?」

「なに!」

突如了平の目の前に翼を持つ2本足の竜が二匹現れた。大きさは2メートル位あった。

「あらかじめ」

「な、なんなのだこいつらは!？」

「そいつらは晴ワイバーンのプテロとサウロだ! お前達奴を捕まえろ!」

二匹の晴ワイバーンは了平に襲いかかる。

「お、お兄さん!」

「ちっ仕方がねえ!」

獄寺は了平の援護をするが・・・

「おっと、全員動くなよ!」

ミルフィオーレの兵達が銃を構えツナ達に向けていた。

「アヴァロンの連中はこの武器の恐ろしさは充分分かっているはずだ。一人でも動いたら容赦なく撃つぞ!」

「くそ! もうこれまでか!」

ツナ達はもはや絶体絶命だと思ったその時である。

「ギヤオオオオオオオオ!」

「えっ?」

上から何かの叫びを聞き全員が上を見上げるとそれは了平が二匹の晴ワイバーンを倒す瞬間であつた。

「って、えええええええええええ!？」

「う・・・うそ・・・」

「マジかよ!？」

ツナ達がそう言っている間に二匹の晴ワイバーンは落下するのであつた。

ドオオオオオオオオオオオンッ

「ば・・・ばかな・・・」

ボックス

ミドリーフェは自分の匣兵器がやられる光景を見て相当驚いていた。だがそれが彼の最大の間を生み出してしまった。ミドリーフェが驚いている間に了平はミドリーフェの懷に近づいていた。

「貴様で最後だあああああ!」

「し、しまった!！」

了平はミドリーフェの懷に入り込み、3連続のパンチを繰り出す。

「^{ミドリーフェ}極限イングラム!！」

了平の必殺技を喰らいミドリーフェは遠くへ吹っ飛ばされるのであった。

「ぎゃあああああああああああ!!!!!」

「ミ、ミドリーフェ隊長が!！」

「逃げろおおおおお!！」

ミルフィオーレの兵達はミドリーフェがやられたのを見て撤退していった。

「おい、沢田、タコ頭!」

了平はツナと獄寺を呼びながらツナ達がいる処に下りて行った。

「ありがとうございますお兄さん。助かりました」

「けっ、てめえに助けられるとはな」

「ああ、無事で何よりだ!それにしてもお前達今までどこにいたんだ?探したぞ!」

「ええ、いろいろあつて・・・」

「ところでここは一体どこだ?」

「えつとですね・・・」

「話は後にしてそいつを連れてアヴァロンへ戻るぞ!」

アロウンは了平をアヴァロンへ連れて行こうと提案する。

「ん・・・誰だ貴様は?どこかで見たような気がするが・・・」

「まあ、とりあえず俺達に付いて来い!」

了平はアロウン達と一緒にアヴァロンへと向かったのであった。

一方オガムは調査を終えアヴァロンへ戻ろうとしていた。その時である。

「おや?」

オガムは向こうの茂みから人の気配を感じた。それも複数だ。

「はて？そこにおられるのは誰ですか？」

オガムの言葉に応じて茂みに隠れていた者達はオガムの目の前に現れる。

「おやおや、あなた方はリボン殿が言っていた方達ですな。リボン殿がお待ちしておりますぞ」

果たしてオガムの前に現れた者達の正体とは・・・

第18話 晴の守護者（後書き）

次回、ツナ達の前にある人物達が現れる。

第19話 5人の客人

ツナ達は了平を連れてアヴァロンに戻り、広間に集まっていた。今ここにいるのはツナ、リボーン、獄寺、山本、アロウン、アルサル、リアンノン、モルガン、オクタヴィア、スィール、ラスティ、タリエシン、デキムス、そして了平の14人である。彼らは了平に事情を説明していた。

「つまりこういう事だな。沢田達は突然異世界に飛ばされ、その世界ではなんと俺達が倒したはずのミルフィオーレファミリーがいて神聖帝国と言う国を乗っ取り各地を侵略し非道な行いをしていた。そこで出会ったのが初代ボンゴレファミリーのかつての仲間魔王アロウンとその仲間達。沢田達はそいつらと共にミルフィオーレファミリーと戦う事にした訳か」

「はい、その通りです。」

了平は納得したように今起きている事を理解し、リアンノンはうれしそうに答える。

「そうと分かれば俺も極限に協力するぞ！打倒ミルフィオーレ！打倒神聖帝国！」

「やっと分かってくれましたか・・・」

「これだけの説明を理解するのに5時間以上かかるとは・・・」

「アルサルやモルガンより頭悪いなこいつ！」

「っつておい！」

了平に事情を理解するのに5時間以上もかかり日も暮れていたのである。無理もない彼は二転三転する話は二転までが限界であるからである。そのためアロウン達はかなり疲れていた。

「全く、ボンゴレの守護者が現れたと聞いたからどんな奴かと思っただら・・・」

オクタヴィアは了平の頭の悪さにあきれていた。

「ははは、そういう人なんだよな笹川先輩は」

「たくつ、相変わらずの頭の悪さだぜ！」

「なんだとタコ頭タコ!!」

「やんのかこの芝生!!」

獄寺と山本は互いにケンカ腰になって睨みあった。その時獄寺は何人かが笑いを堪えていたのに気づく。

「おい、どうしたんだ？」

「だ、だつて・・・」

「タ・・・タコ頭タコ・・・」

「あはははは！もーダメだ！やつば変なあだ名だな！」

「モ、モ〜ちゃんつたら失礼でしょ・・・ぷっ」

「いや〜、まさか君にそんなあだ名があつたなんて知らなかったよ」
スィール、ラスティ、モルガン、リアンノン、タリエシンはどうやら獄寺のタコ頭タコと言うあだ名がおかしくて笑いを堪えていたようだがモルガンは我慢の限界で笑ってしまった。

「こ、こいつら後で殺してやる（怒）」

「まあ、落ち着けて獄寺！みんなもその位にしておこーぜ」

「そうだぞ。そういえばリョウヘイ聞けばお前はツナ達が心配になつて祖国を5周してまで探し回ってきたらしいな！」

オクタヴィアは話を切り替えた平に話しかける。了平はツナ達が行方不明になっている間、日本を5周してまでツナ達を搜索していた。そのおかげで体を鍛えられたのである。

「おかげでまた強くなつたぞ！」

了平は日本5周して鍛え上げられた筋肉を見せつける。前よりかなりたくましくなっていた。晴ワイバーンを倒せたのもそのおかげと言つてもおかしくはない。

「おお、それは頼もしいじゃないか。これからよろしく頼むぞ！」

「おう、まかせておけ！」

アルサルと了平はかなり意気投合したようだ。そしてアルサルは了平にある質問する。

「ところでお前が使つてたのは格闘技なんかか？」

「おお、あれはだな・・・」

「あれはボクシングってやつだ！前に見た事がある」

了平がボクシングの事を話そうとするがアロウンが変わりに答える。

「おお、その通りだ！」

「ボクシング？」

「そいつらの世界の格闘技の一種だ」

「ツナ達の世界の格闘技？なんでお前がそんな事知っているんだ？」

「初代晴の守護者がボクシングの使い手だったからな」

「初代晴の守護者が！一体どんな奴だったんだ？」

アルサル問いに答えアロウンは初代晴の守護者について説明し始めた。

「初代晴の守護者ナツクルは最強の名をほしいままにした無敗のボクサー、つまりボクシングの使い手だった男だ。ボクシングの大会では連続で優勝するほどの強さを持っていた」

「連続優勝するほどの強さ！それはすごいな！」

「ところがある試合で対戦相手を殺してしまい、ナツクルは拳を封印し神に仕える仕事につきそれ以来奴がボクシングをやる事はなかった」

「そんな事が・・・」

「よほどショックだったんですね。対戦相手を殺してしまったことが」

「だが、一度だけボンゴレファミリーに危機が訪れた時、己に3分間の時間制限を課し、その拳でファミリーを救ったらしい」

「てことはたった3分で敵を倒したのか！？」

「まあ、そういう事になるな」

「おお、すごいぞ！」

アルサル達が初代晴の守護者の事で騒ぎ始めたその時、リボーンのおしゃぶりが突然光りだした。

「なっ！なんだこの光！？」

「リボーンちゃんのおしゃぶりが光っています。」

「どうなってるんだ!？」

ツナ達だけはそれを見て別の意味で驚いていた。

「おしゃぶりが光っている!ということは……」

その時オガムが広間に入ってきた。

「アロウン様、ただいま戻りました」

「オガム。戻って来たか」

「おお、その方ですな晴の守護者殿は。私はオガムと申します。以後お見知りおきを」

了平の事はもうアヴァロン中に広まり、オガムの耳にも入ったらしい。

「おお、笹川了平だ。こちらこそよろしく頼む!」

「ところでリボーン殿、あなたに客人が来てますぞ」

「えっ!リボーンに客!?まさか!？」

ツナは思った。この世界に自分達の知り合いはいないはず、しかもこの状況で客が来るという事は……

「どうぞ、お入りください」

リボーンの客人は広間に入ってくる。ツナ、獄寺、山本、了平はその客人の顔を見て驚く。

「なっ!」

「げっ!てめーらは!？」

「おっ、やっぱあいつらもこの世界に来ていたんだな!」

「おおお!」

リボーンだけは彼らを見て口元がニヤツと笑っていた。

「ふっ、やっと来たようだな」

客は4人いた。だがその客人は赤ん坊であつた。アルサル達も彼らを見て驚いていた。一人目は鷹を連れバンダナをした金髪の赤ん坊もう一人はフルフェイスのヘルメットを被った赤ん坊。もう一人はサルを連れたカンフー服を着た赤ん坊。そして最後の一人はワニを連れた白衣を着た赤ん坊である。彼らもリボーン同様おしゃぶりを首にぶら下げており、そのおしゃぶりもリボーン同様光っていた。

「あ・・・赤んちゃんがいつぱいます！」

「他にもいるぞ。おい、隠れているんだろ！出て来い！」

「全く、しょうがないなあ」

「くくくく！！」「くくく」

リボーンの言葉にに応じて、霧のような物が現れ赤ん坊が現れた。巻きガエルを連れた黒いフードを被った赤ん坊である。その赤ん坊もおしゃぶりをぶら下げ他の赤ん坊のおしゃぶり同様光っていた。

「ほ、他にもいやがった！！」

「な・・・なんなんだこいつらは・・・」

アルサル達の問いにリボーンが答える。

「こつらは俺と同じ”アルコバレーノ”と呼ばれる赤ん坊達だ！」

今ここに7人の最強の赤ん坊アルコバレーノの内6人が集結したのである。

第19話 5人の客人（後書き）

次回、アロウン達とアルコバレーノ達が語り合う。

第20話 アルコバレーノ

突如ツナ達の前に現れた5人はマフィア界最強の赤ん坊アルコバレーノ達であつた。

「アルコバレーノ？一体なんだそれは？」

アルサルはアルコバレーノが何なのかリボーンに質問した。

「アルコバレーノとはマフィア界最強と言われた7人の赤ん坊の事だ」

「マ、マフィア界最強の赤ん坊！？」

「7人つてことはあと一人いるのか！？」

「リボーンもその赤ん坊達の一人という訳か！どうりで強いはずだ！」

アルサル達がアルコバレーノの事で驚いている間、カンフー服を着た赤ん坊が喋りだした。

「お久しぶりですねリボーン。これで行方不明の橙色のおしゃぶりのアリア以外は全員揃つた事になりますね」

赤いカンフー服を着た赤ん坊がそう言った後、アロウンはリボーンに話しかける。

「リボーン、そろそろこいつらの事を紹介してくれないか？」

「それもそうだな。紹介してやるぞ！まずあいつは赤色のおしゃぶりのアルコバレーノ風^{フォン}。拳法の達人で武道大会を3年連続優勝し、今までに107の拳法を生み出した男だ！」

「さ・・3年連続優勝！？」

「フー、以後お見知りおきを」

「次にあのバンダナをした奴は青色のおしゃぶりのアルコバレーノコロネロ。かつてはCOMSUBIN^{コムスビン}に所属していた軍人だ」

「オムスビン？」

リアンソンの耳はその様に聞こえたらしい。

「COMSUBIN^{コムスビン}だ！イタリアの海軍潜水奇襲部隊の事だ！」

「コロネ口師匠！師匠もこの世界に来ていたのか！」

「久しぶりだな了平」

「師匠だと！？」

「応、コロネ口師匠は以前俺を鍛えてくれたんだ！マジマヤノン極限太陽はその時習得した技だぞ！」

「そうだったのか！」

「よろしく頼むぞコラー！」

「次にあの白衣の奴は緑色のおしゃぶりのアルコバレーノヴェルデ。マッドサイエンティスト」

「ま・まっど何？」

アルサルは聞きなれない言葉を聞いて戸惑った。他のみんなは頭に？を浮かべていた。

「マッドサイエンティスト。危険な科学者の事だ。特にヴェルデは天才的頭脳を持っている」

「天才的頭脳！？てことはリボーンより頭がいいのか！？」

「リボーンと私の知能と一緒にするとは。この愚か者め！」

「なんだと！！」

「にゝさま落ち着いて！」

アルサルはヴェルデの言葉を聞いて怒り出し、リアンノンはアルサルを落ち着かせようとした。アルサルが落ち着いたところでリボーンは他のアルコバレーノの紹介を始めた。

「次にあの黒いフードを被っている奴は藍色のおしゃぶりのアルコバレーノバイパー」

「その名前はよせと言っているだろ！今はマーモンだ！」

バイパーと言われた途端突如怒り出した。どうやらバイパーと言う名前を嫌っているようだ。

「そうだったな。奴は幻術を操る^{エスパー}超能力者だ」

「そうか、やはりそいつは術士だったか」

アロウンはマーモンの幻術を見て術士ではないかと思っただけらしい。

「今はボンゴレの独立暗殺部隊”ヴァリアー”の幹部についている」

それを聞いたアロウン達は驚いた。

「ボンゴレの暗殺部隊だと！ボンゴレにそんな物騒なモンが出来たのか！？」

「ああ、時代の流れでな」

「そ・・そんな・・ボンゴレに暗殺部隊ができてたなんて・・・」
「信じられないよ・・・」

スィールとラスティはボンゴレに暗殺部隊が出来ていたという事実を知ったせいで落ち込んでしまった。

「ちなみにこいつはかなり金にがめつい奴だぞ！」

「うわっ・・そういうところは誰かさんにそっくり」

「どんな世界にもあんなのがいるんだな」

「そしてあのヘルメットを被っているのが紫色のおしゃぶりのアルコバレーノスカル。不死身のスカルと呼ばれている俺のパシリだ」
パシリと聞いたスカルはズッコケた。

「パシリじゃなあああああい！リボーン貴様何て事言いやがる！」

「今はカルカツファミリーと言うマフィアの軍師を務めている」

「ほお、軍師をやっているのか」

「でもなんか彼だけ他の赤ん坊と比べるとあんまり強くなさそうだね・・・」

「パシリ扱いされてるらしいからあの中で一番弱いんじゃないのかあいつ？」

「なんだとー！！」

アルサルとタリエシンの言葉を聞いて怒り出すスカルであった。

「まさかアルコバレーノもこの世界に飛ばされていたなんて・・・という事は雲雀さんも！」

「当然だろ！アルコバレーノも雲雀も俺達と同じ現象でこの世界に飛ばされたんだぞ。本当はお前達も薄々気づいていたんじゃないのか？」

リボーンの言う通りである。確かにツナや獄寺や山本もアルコバレーノや雲雀もこの世界にいるんじゃないのかと思っていたが彼らが

この世界にいる確証がなかったため今まで忘れていた。

「確かにそう思った事もあったけど・・・ところでどうしてアルコバレーノがここに？」

ツナはアルコバレーノ達がどうしてここにいるのか質問した。その問いにリボーンが答える。

「ああ、オガムに頼んでこのアヴァロンにボンゴレファミリーという集団が現れたという噂を流してもらったんだ」

「なるほど！奴らはその噂を聞集まったて事っスね！」

「その通りだぜコラ！」

「それにしてもまさか一気に全員で来るとはな」

「まあ、全員集まったのは偶然だけだね・・・」

「ここへ来る途中であのご老人と会ってこの城に連れてもらった訳です」

「そうだったんだ」

ツナ達がそう言った直後にアロウンが話しかける。

「で、お前らはここへ何しに？ただリボーンに会いに来ただけではないだろ？」

ここからが本題である。

「ええ、事情は大方知っていますよ」

「まさかミルフィオーレがこの世界にいとるとはな。俺達も手伝ってやるぜコラ！」

「本当か！」

「本来なら私はお前達に協力するつもりはないが元の世界に戻るまで協力してやろう。それにこの世界にはいろいろな研究材料があるしな」

「仕方がないから俺様もこの世界にいる間はお前達に協力してやる」

「そうか、これからよろしく頼むぞ！」

アルサルがそう言ったその時、マーモンが喋りだした。

「僕はただ働きはしないよ。金を出すなら話は別だけど」

「って、こいつ・・・」

「けどこの状況じゃ仕方がないね。特別にやってやるよ。ミルフィオーレと戦えば元の世界に帰る方法を見つける事ができるかもしれないからね」

「でも帰れる方法って言っても・・・」

ツナがそう言うのとヴェルデが喋りだした。

「では聞くがお前達はミルフィオーレはどうやってこの世界に来たと思ってる？」

それを聞いたツナは気づいた。

「そうか！ひよっとしたら元の世界に帰れる方法が！」

「そういう事だ！」

ツナ達がそのようなやり取りをしている間アロウンはある事を考えていた。

「どうしたんですかアロウン様？」

「いや、なんでもない」

その夜アヴァロンの場内のある部屋で一人の人物が黒い箱のような物を持って何か話していた。

『そつかあ、晴の守護者だけでなくアルコバレーノ5人まで来ちゃったんだ。それじゃあ引き続き情報収集よろしく頼むね』

「了解」

第20話 アルコバレーノ（後書き）

次回、ツナ達はラスティの武器屋に寄る。

第21話 武器屋

ある日ツナは了平にアヴァロンの案内をしていた。

「極限に広いなこの城は！」

「ええ、俺達も最初はそう思いましたよ」

カキーン

カキーン

「ん？今のは何の音だ？」

了平がそう言っているとツナ達はその音がどこから聞こえてくるのか周りを見回した。そしてその音がするのはどうやら向こうの建物のようだ。

「あれは確かラスティがやっている武器屋ですよ」

「ラスティというあの小さい奴か」

「ええ、ラスティは鉾山妖精っていう妖精でかなりの力持ちの妖精なんですよ」

「おお、あいつにそのような力があつたのか！？」

「そういえば店の前は通るけど一度も入った事が無いや。リボーンと獄寺君と山本は時々寄っているらしいけど」

「それじゃあせっかく近くまで来たんだ。どんなものか見てみようではないか！」

「そうですね。行きましょう」

こうして三人はラスティの武器屋に入って行った。

「いらっしやい。あ、ツナにリョウヘイ！」

「やあ、ラスティ」

「あれ、ツナ達が僕の店に来るなんて初めてじゃない？」

「うん、今日はラスティの店がどんなものかを見ようと思って」

「それじゃあゆっくり見てってね！」

ツナ達は店の周りに置いてある武器を見てみた。

「なんと！これだけの武器をお前が造ったというのか！？」

「うわあ、すごいよラスティ！」

ツナと了平はラスティの造った武器を見て驚いていた。

「えへへ、それほどでも」

ラスティが喜んだその時リアンノンが入って来た。

「こんにちは、ラスティさん」

「あ、いらっしゃいリアンノン」

「あれ、リアンノンなんでここに？」

「ええ、注文していた品を取りにきたんです」

「そうなんだ。って、あれ？」

ツナは思った。彼女は魔法を使うので武器はいらないはず。あるとすれば杖ぐらいだ。それならエポナの店にあるはずだ。ツナがそう考えている間、ラスティはリアンノンが注文した商品を持ってきた。だがそれは武器屋で売ってあるはずがない物であった。

「はい、新しい包丁ですよ」

「「えっ????!」」

武器屋なのに包丁を出してきた。

「やっぱりラスティさんの造った包丁はいいですねえ。それでは私はこれで」

そう言いながらリアンノンは店を出た。ちなみに代金は注文した時に払い済みである。

「ありがとうございます！」

「ほ・・・包丁？」

「ど・・・どういう事？」

その時である。

「金物屋さ〜ん」

「「えっ!?!」」

今度はリムリスが店に入ってきた。

「今、金物屋と言ったぞ!？」

「ま・・・まさか・・・」

「いらつしゃいませ!」

「この前修理を頼んだお鍋が直ったというのでを取りにきました」

「はい、ちよつと待ってください」

ラスティは

「はい、ちゃんと直りましたよ」

「ありがとうございます!ではこれから仕事がありますのでこれでリムリスは店を出た。ちなみに修理代は払い済みである。

「ありがとうございます!」

「ラ、ラスティ、もしかして・・・武器屋と金物屋両方をやってるんじゃない?」

「うん、そうだよ」

「やつぱり・・・」

「なんで両方をやっているのだ?」

ラスティは了平の問いに答えた。

「僕、武器を造るよりも金物を造る方が好きなんだね」

「だったら金物屋の方をすればいいのに」

「それもそうだ!なんで両方をやっている?」

ラスティは二人の質問に答える。

「僕が鉾山妖精の事は知ってるでしょ。鉾山妖精は力だけでなく技術も突出していて特に武器や防具を造るのに優れているんだ。僕がアロウン様の元にいるのはそのためなんだ。でも前の行商のくせが治らなくて金物屋の」

「アロウンはその事について何も言わなかったの?」

「アロウン様は「鍋なんて造ってる場合か!武器を造れ武器を!」って言われて怒られるけど、アロウン様は金物屋はこっそりやつておけって言われたからね」

「こ・・・こっそりやれて・・・それじゃあアロウンの前では隠れてやってるんだ・・・」

「あつ、そうだ！せつかく来たんだから新作の包丁とお鍋見てつてよ！」

ラスティは新作の鍋や包丁を持ち出し店頭に並べた。

「へえ、よく出来てるね」

「ちなみにこの新作のお鍋と包丁モス力の装甲を使って造ったんだよ」

「つて、ええええええええええ！モス力で造ったのこれ！」

「うん。いい素材が手に入ってよかったよ」

「ははははは……」

ツナ達は苦笑した。最初のアヴァロン襲撃の時とコダーディアとの戦いでモスカの残骸は全てラストイが引きとった事を思いだした。モスカの残骸を引きとったのはこのためであったのだ。

「ところでラストイ、お前はかなりの力持ちと沢田から聞いたがどれ位の力があるのだ？」

「それじゃあ、そこにあるハンマーを持って見て」

ラストイが指を指したのはラストイが使用しているハンマーだ。

「これって、ラストイがいつも使っているやつだよね？」

「そうだよ」

「どれどれ、ふん！」

了平はラスティのハンマーを持ち上げようとするが……

「な、なんだこれは！極限に重いぞ！」

「えっ、そんなに重いんですか？」

「沢田も持ってみろ！」

了平はハンマーから手を離し、ツナがハンマーを持つととする。

「よいしょ・・・って重っ！！ラ、ラストイ、こんな重い物をいつも持ち上げていたの！？」

「そうだよ。ほら」

そう言うつとラストティはハンマーを軽々と持ち上げる。

「おお、すごいではないか！その細い体のどこにそんな力があるの

だ!？」

了平はそう言いながらラスティの体格を確かめようとラスティの腕を触る。

「つて、リヨウヘイ!？」

結構細い腕だ。とてもあれほどの力が出るとは納得できない。

「胸板もこんなに・・・」

了平がラスティの胸板を触ったその時である。
ぷにつ

「ん？」

胸に何か柔らかい感触があった。

「はわわわ!!」

「な、何iiiiiiiiiiiiiiii!？」

その時了平はとんでもない事実を知り顔を赤らめて倒れる。

「どうしたんですかお兄さん？」

「な・・・な・・・」

かなり慌てているため言葉が出ないようだ。

「一体どうしたの二人とも？」

「さ・・・沢田・・・こいつは・・・」

「じ・・・実はね・・・」

ラスティは被っていたフードを取る。

「え!？」

ツナはラスティの顔を見て目を疑った。どう見てもあれは・・・

「ええええええええ!？ラスティってまさか女の子だったの!？」

「やつぱり気づいてなかったんだね。まあ、こんな格好でよく男と間違えられる事もあるけど」

ラスティが自分の事を僕なんて言うためでもあるが。

「ご・・・ごめん気づかなくて!」

「極限にすまなかった!まさかお前が女だったとは!」

二人はとりあえずラスティに謝るのであった。

「い、いいよ気にしないで」

一方、獄寺と山本はアルサル、モルガン、オクタヴィア、それにゲールの戦士達と一緒に浜辺で蟹狩りをしていた。

「今日は大漁だな！」

「ハハ、今夜は蟹鍋だな！」

だが、彼らは気づいてはいなかった。少し離れた場所から彼らを見ている人物がいる事を。

「さて、そろそろ行くか」

第21話 武器屋（後書き）

次回、強敵現る！

第22話 強敵 前篇

アルサル達は蟹狩りを終え浜辺で一息をつけていた。

「ところでアロウンはどうしたんだ？」

山本はアロウンが今日の狩りに来ていないのが気になってたらしい。
「どうせまだ寝てんだろーよ」

「ああ、ゴクデラの言うとおりだ。まったくあいつは族長としての義務って物が・・・」

その時である。

ブオオオオオオオオ

「ん？」

「なんだ？」

「何の音だ？」

突然聞きなれない音が聞こえてきた。

「獄寺、この音って！」

「こ・・・この音は・・・」

だが獄寺、山本にとってはそうではないようだ。

「何の音が確かめて来るぞ！」

モルガンは音の正体を確かめるために音のする方向へ向かった。

「おいモルガン！」

「俺も行ってくる！どうもあの音が気になる！」

「同感だ！俺も一緒に行くぜ！」

「ならば私も行くでしょう。あいつだけでは心配だからな」

獄寺、山本、オクタヴィアはモルガンの後を追った。

「しょうがないな。みんなはそこで待っていてくれ！」

「分かった」

アルサルはゲールの戦士達をその場で待機させモルガン達の後を追ったのであった。

アルサル達は謎の音が聞こえたと思われる場所に着いた。

「確かこの辺りだと思うが・・・」

その時である。

ブオオオオオオオオ

「ん！」

あの音が聞こえてきた。それもだんだんこちらに近づいていた。

「何か来るぞ！」

そしてそれはアルサル達の目の前に現れた。それはアルサル、モルガン、オクタヴィアから見れば鉄の塊のようであった。見た目は黒くそして二輪がついており、かなりの速さを持っていた。しかもそれには人が乗っていた。やがて鉄の塊はアルサル達の目の前で止まった。

「な、なんだありやあ!？」

「鉄の塊だ!鉄の塊が動いている!」

「あんな物見たことがないぞ!」

アルサル、モルガン、オクタヴィアはそれを見て驚いていた。だが獄寺、山本は別の意味で驚いていた。なぜならそれは二人にとって見慣れた物だからだ。

「んなバカな!」

「なんでこの世界にあんな物が・・・」

「お前達、あれがなんなのか知っているのか!？」

オクタヴィアは獄寺達にあれがなんなのか質問した。

「あれはバイクって言って俺達の世界の乗り物だ!」

「お前達の世界の乗り物だって!あんなのがあるのか!？」

「なんでそんな物がこんなところに・・・」

アルサル達がそうしている間にバイクに乗っている人物がバイクから下りた。その人物の見た目は白いフルフェイスのヘルメットを被っており、格好は黒いシャツに紫のネクタイ、男物の白いスーツ、

そして黒い手袋をしていた。バイクに乗ってた人物はヘルメットを外した。

「ふう」

「なっ！」

アルサル達はその人物の顔を見て驚いていた。なんと少女である。

白く長い髪、紫色の瞳、年齢は16歳くらいだろうか。アルサルは彼女に話しかける。

「お前何者だ！？」

アルサルが少女に質問すると少女は喋りだした。

「僕の名前はシア。君達と遊びに来たんだ」

「……はっ？」「……」

アルサル達はその言葉を聞いて哑然とした。

「な、何言ってるんだあいつ？」

「なんだ。お前あたしらと遊びたいのか？」

モルガンはうれしそうに言ったが……

「うん。だけど殺し合いつていう遊びだけだね」

シアがそう言った瞬間シアは無表情のまま殺気を放った。

「……！！」「……」

シアの放つ殺気を感じ取ったアルサル達は武器を構えた。

「まさかお前、ミルフィオーレなのか！？」

「そうだよ。どうしても君達と遊びたくて許可をもらってここに来たんだ」

（こ……こいつ……今までの刺客とは違う！）

彼女が放つ殺気は普通ではない。ミルフィオーレの刺客として送られたクルデルやコダーディアやミドリーフエとは明らかに違うとアルサル達は確信した。

「先に攻撃していいよ」

「何っ！？」

「どういふつもりだてめえ！？」

「いいから、そっちから攻撃してよ」

「本当にいいのか？ならあたしからいくぞ！」

モルガンは弓を構えそれをシアに向けた。

「待てモルガン！」

「喰らえ！」

モルガンは矢を放つ。その時シアは懷から何かを出しそして・・・

ドガアアッ

「何っ！」

モルガンの放った矢は一つの爆発と共に粉碎された。

「そんだけ？」

シアが出したのは二丁拳銃だ。黒い炎のラインが入った紫色のオートマチックの銃である。シアはそれでモルガンの矢を防いだのだ。

「またあの飛び道具か！」

「だがなんだあの威力は！？普通ではなかったぞ！」

アルサルとオクタヴィアはシアの放った弾丸の威力を見て驚いていた。この世界には銃などの高度な飛び道具が存在しないため彼らは最初は驚いていたが、拳銃であればどの威力を出す事にはかなり驚いていた。

「に、二丁拳銃！！」

「ま・・・まさか・・・」

獄寺と山本はシアの武器を見て嫌な予感がした。それはシアの戦闘スタイルがある人物の戦闘スタイルと同じだからだ。

「今度はこっちから行くよ！」

シアは二丁拳銃でアルサル達の足元を狙い連射した。ちなみにその弾丸は紫の炎に包まれていた。

「ぐっ！」

「うわあああ！！」

アルサル達はなんとか避けたが爆発で吹き飛ばされる。シアは今度は銃を背に向け銃を放ち、その弾の推進力でアルサルの目の前に移動した。

「何っ！？」

「遅いよ」

シアは右手に持っていた銃を鈍器のようにアルサルの頭を叩く。

「ぐはっ！」

そして左手に持ってた銃をアルサルに向けて銃を放とうとするが

「させるか！」

「！」

山本はいつのまにかシアに近づき刀を振るうがシアはそれを避ける。

「ヤマモト！お前いつのまに！」

「こいつのおかげさ」

よく見ると山本は右手に持っている時雨金時の他に左手に雨の死ぬ
気の炎を浴びた小刀3本を持っており山本と一緒に犬がいた。

「そいつはもしかしてヤマモトのもう一つのボックスの匣兵器か！」

「ああ、秋田犬で次郎ってんだ。俺の小刀3本の面倒見てくれてる」
山本がそう言っている間、カーネジオッジャ雨犬の次郎は山本に甘えていた。

「そんな事してる暇あるなら戦つてよ」

シアは再び銃をアルサル達の方角に向けた。

「ぐっ、来るぞみんな！気を抜くな！」

アルサル達は体勢を立て直し武器を構えた。そして再びシアは攻撃
をしかけようとする。

「さあ、殺し合い再開だよ」

第22話 強敵 前篇（後書き）

次回、シアの必殺技が炸裂する！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0247t/>

ティアーズ・トゥ・ティアラ 七つの炎

2011年10月23日07時08分発行